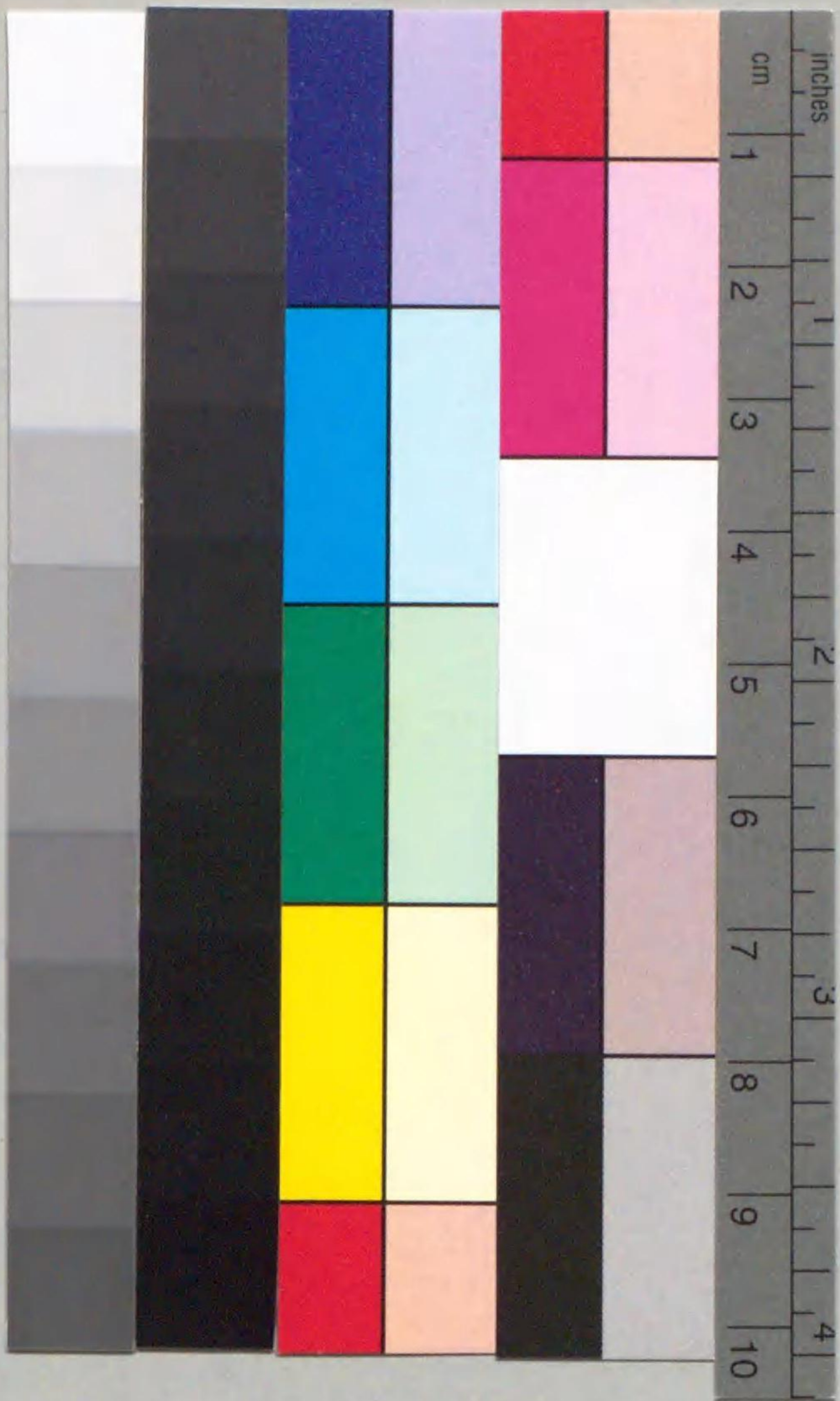
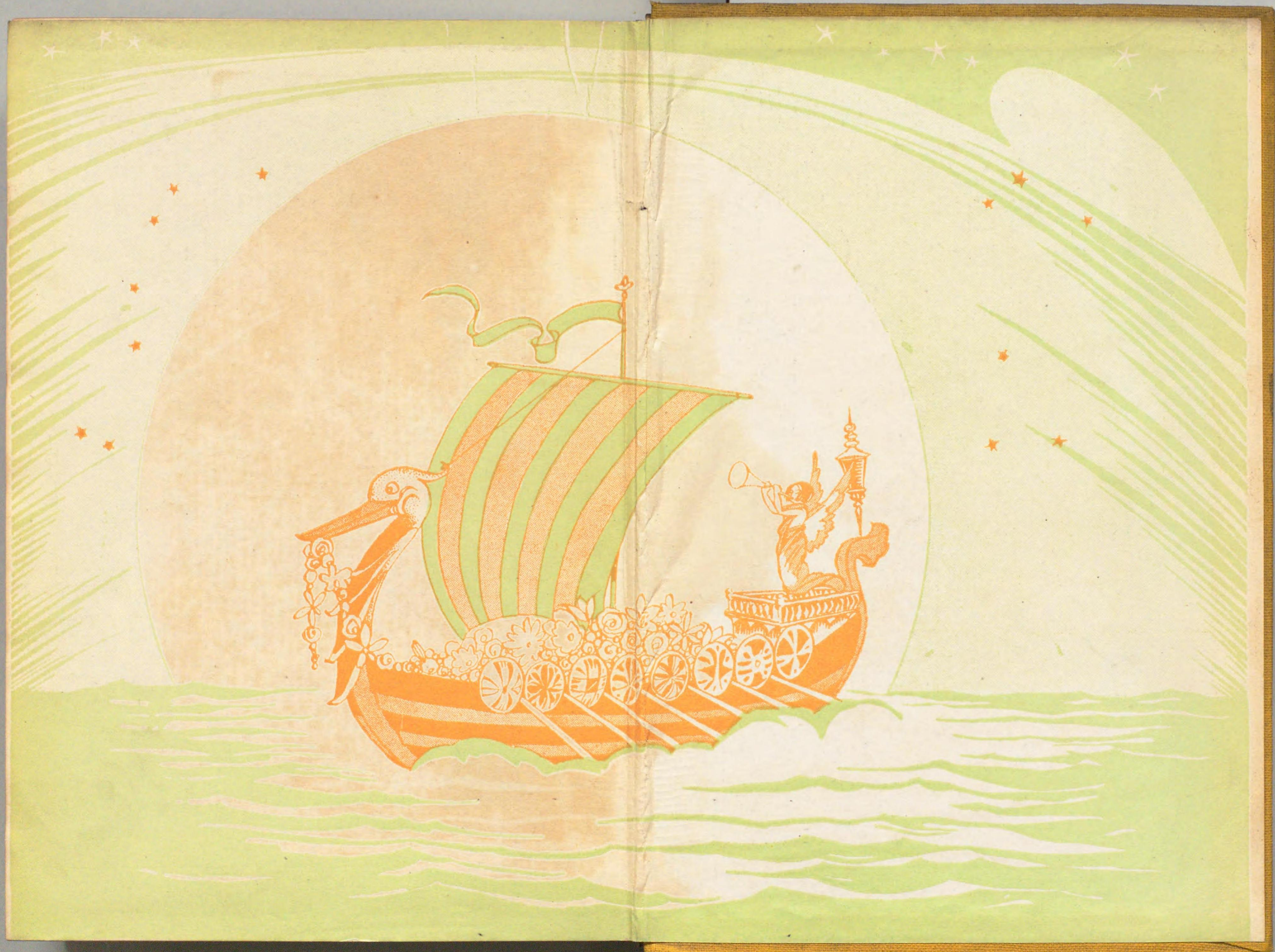


315  
72









金の星家庭文庫

(3)

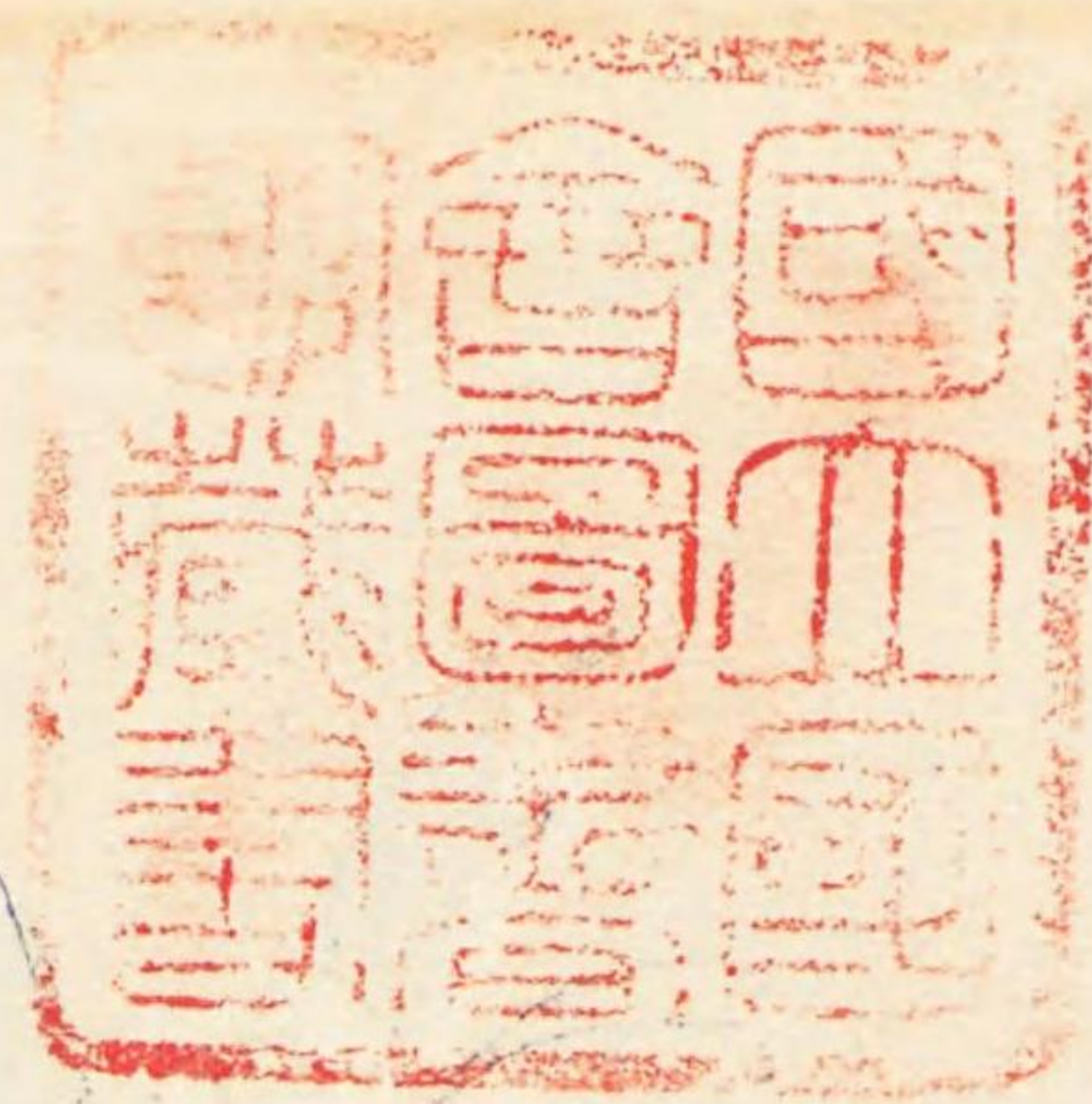


金の星社版





27  
K-13



全の児童文学史

150627

はしがき

この集に入つた「西遊記」「ドン・キホーテ」「グリム童話」の三篇が、何れも童話文學として、世界の傑作であることはいふまでもありません。

「西遊記」にしても、「ドン・キホーテ」にしても、本来少年少女を目標にして書かれたものではありませんが、それが何時か大人の間に讀まれるよりも、少年少女に愛讀されるやうになつてしまひ、却つて、今では童話文學として世界の珍寶となつてゐます。勿論、原文の通りでは少年少女の讀物として適しないので、各々編者によつて手心されてゐます。

この文庫に收められた「西遊記」も「ドン・キホーテ」も、さういふ意味から、いろ／＼の工夫を加へられてゐます。もと／＼二つの作とも非常に





# 目次

## 西遊記

一、玄奘三藏と孫悟空……………三	二、龍の馬……………二〇	三、猪の八戒……………二五	四、沙悟淨……………二九	五、人参果……………三五
------------------	--------------	---------------	--------------	--------------

大部な作でありますから、少年少女の讀物として不要な部分は捨て、最も重要な面白い部分を抜出してつゞつたものです。退篇な原作を讀むよりも、却つて興味のあるところにこの「西遊記」と「ドン・キホーテ」の價値と特色とがある譯です。

「グリム童話」は有名な獨逸のグリム兄弟の集めた獨逸民族の童話です。世界中にこれ程廣く讀まれた童話はなく、また何れも獨逸民族の偉さを思はせるやうな立派なものばかりです。グリム兄弟の書いたお話の數は、非常に澤山でありますが、こゝに集められてゐるお話などは、その中でも優れた作として擧げられてゐるものです。

編者









グ  
リ  
ム  
童  
話

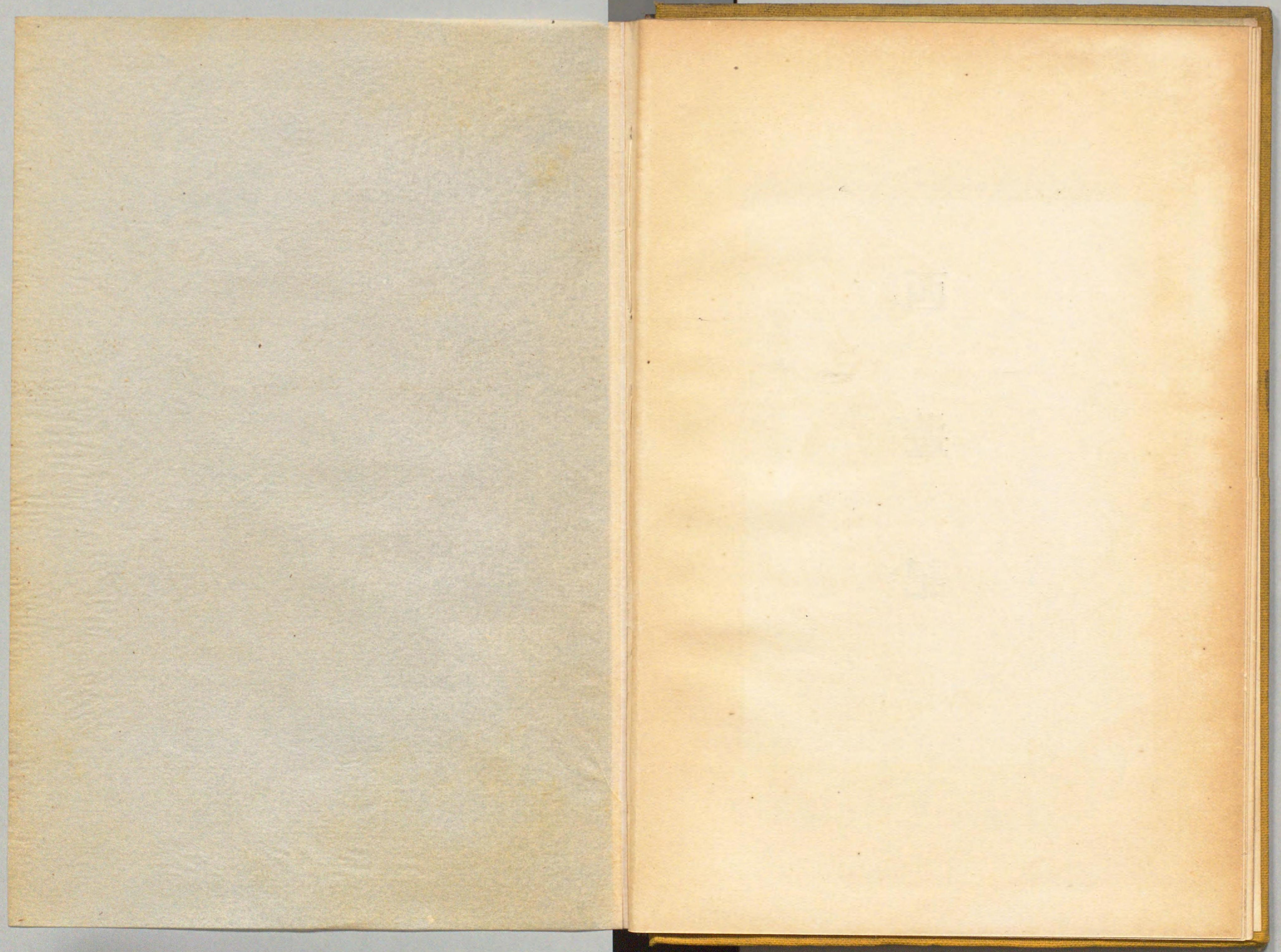
一、	ルムペルスチルツキン	………	三五六
二、	狼 <small>おほのみ</small> と七匹 <small>ひつ</small> の小山羊 <small>こやま</small>	………	三七四
三、	蛙 <small>かへる</small> の王 <small>わら</small> 子 <small>こ</small>	………	三八八
四、	ラプンツェル	………	四〇四
五、	雪姫 <small>ゆきひめ</small> と七人 <small>にん</small> の倭人 <small>びと</small>	………	四二七
六、	音 <small>おん</small> 樂 <small>がく</small> 師 <small>し</small>	………	四四五
七、	黄 <small>わう</small> 金 <small>こん</small> 鳥 <small>てう</small>	………	四五五
八、	勤 <small>きん</small> 勉 <small>べん</small> な小 <small>こ</small> 鬼 <small>おに</small>	………	四八四
九、	ヘンゼルとグレテル	………	四九一

西さい

遊ゆう

記き











بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

一 玄奘三藏と孫悟空

大昔、支那の國を唐といつてゐた時分のことです。その頃、唐には太宗皇帝といふ天子さまが位についてゐるでになりました。

或時、わざ／＼天竺から、觀世音菩薩が唐の國へいらつしやつて、天竺の雷音寺に三藏の眞經といふ尊いお經があるから取りに來いと仰せになつて、そのまゝ雲に乗つて西へお歸りになりました。

太宗皇帝は、觀世音菩薩の後姿を拜んで、

「わざ／＼觀世音菩薩がお經のことを知らせに來て下さつたのだから、誰か使をやつて、早く取寄せたいものだ。」と仰いました。

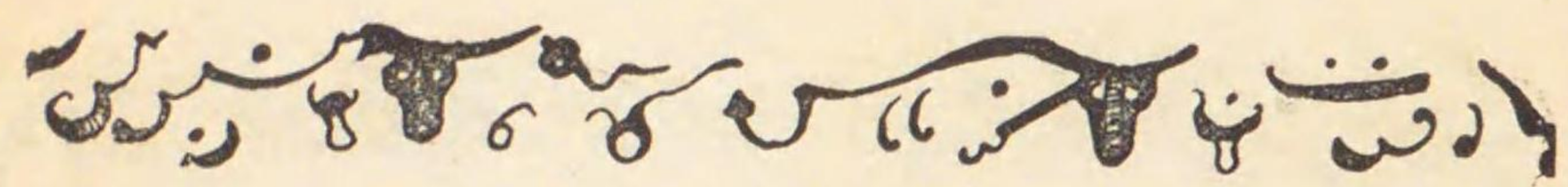




すると、丁度その時、お傍に居合せた玄奘といふ偉い坊さんが、  
 『私をそのお使にやつて下さい。たとへ命をすてゝもとつて参ります。』と  
 申しました。

太宗皇帝はそれをお聞きになると、大層お喜びになりました。三藏のお  
 經を取りに行くといふので、玄奘に三藏法師といふ名をおつけになりました。  
 た。そしていよく玄奘が出立する時には、皇帝はお供の者を二人と、白  
 い馬を一匹お授けになつて、わざわざ都の外まで送つて行かれました。

さて玄奘の三藏法師は、皇帝からいたゞいた白馬に乗つて、二人のお供  
 の者をつれて、十萬八千里もある天竺への道をとぼくと進んで行きまし  
 た。暫く旅を續けて、唐の國と鞑鞏國の境にある五行山といふ山の麓まで  
 來る間に、お供の二人の者は妖怪に食ひ殺されてしまひましたので、三藏



法師は一人ぼつちになつて、大へん心細く思つてゐらつしやいますと、そ  
 こへ劉伯欽といふ獵師が出て來て、五行山の山の中腹まで送つてくれまし  
 た。そしていざ別れようとしますと、麓の方から、

『お師匠さん、來て下さい。お師匠さん、來て下さい。』と呼ぶ聲がして來  
 ました。

三藏法師はその聲にびくつとなさつて、思はずはつと立上りになりまし  
 て、

『今のは誰が呼んだのだらう?』と、怪しみ乍ら伯欽にお訊ねになります  
 と、伯欽は、

『さあ——』といつて、暫く考へ込んでゐましたが、

『あゝ、あれはきつと猿に違ひございません。丁度五百年前に、一匹の猿



が石の匣の中へ押籠められて、この山の下にをかれてゐまして、鐵の丸や銅の汁を食べさせられてゐるといふ話を聞いてをります。きつとあの猿が招くのでせう。ひとつ下りて見ようではございませんか。』と云つて、三藏法師を案内して山を下つて見ますと、果して石の匣があつて、その中から猿が手を出して招いてゐました。

三藏法師が傍へ近づいてお行きになりますと、猿は喜んで、

『貴方は太宗皇帝の御命令で、天竺へお經をとりに行く方ではございませんか。』と訊ねました。

『如何にもさうだが、お前は何故それを知つてゐる？』

『實は私は貴方のお出でになるのをお待ちしてゐたのです。もと私は華果山の水簾洞といふ處にある青石から生れたものですが、少々通力を持つて

をりましたので、五百年前、天上界へ上つて齊天大聖と呼ばれて、重い役目についてをりましたが、つひ惡戯をする氣が起つて暴れ廻りましたために、釋迦如來のお怒りにふれて、その罰でとう／＼こんな所へ押籠められて了ひました。すると先に觀世音菩薩がお出でになつて、今にこゝへお經をとりに行く人が通るから、その人のお弟子になつて天竺へ行つて來い、そしたら罪がゆるされるであらうと仰せになりました。お師匠さま、お願ひですから、何卒私を哀れんでお救ひ下さいませ。きつとお供をして天竺へ参ります。』

猿が熱心に頼みますし、三藏法師もお供の者を亡くして困つていらつした所でしたから、大層お喜びになつて、救つてやらうとなさいましたが、どうしてやつたらいゝのかわかりません。そこで、



「お前がそのやうな善い心を持つてゐてくれるのは有難いが、私がどうしてお前を助けてやつたらいいのだらう。」と、お訊ねになりました。

「何、わけはありません。この山の頂に金の字で書いた札がありますから、貴方がそれをとつて下されば、私はこゝを出られます。」と猿はいひました。そこで三藏法師と伯欽とは、また山の頂に登つて行つて見ますと、果して金字の札が立て、ありました。三藏法師は先づ拜んで、それを引抜かうとなさいますと、ふいに風が吹き起つて、その札は西の方へ飛んで行つて了ひました。

二人は山を下つて、猿にこのことを話しますと、猿は大へん喜んで、

「お師匠さん、遠くへ逃げてゐて下さい。私がこゝを出る時は、きつとお驚きになるでせうから。」と、云ひました。

二人は遠くの方へ逃げてゐますと、間もなくどーんと天地が崩れるやうな大きな響がして、もうくんと立ちのぼる煙の中から、忽ち猿がひよつこりと三藏法師の前に飛び出して來ました。そして、ていねいにお辭儀をして、

「どうもありがたうございました。さあこれから天竺へお伴をさせて頂きますせう。」と申しました。三藏法師は馬の上から猿の姿を御覽になりました。「お前は何といふ者か？」と、お尋ねになりました。

「私は孫悟空と申します。」  
「さうか、それはよい名前だ。それではわしもお前に行者といふ名を上げよう。」と仰つて、大層お喜びになり、早速悟空をお弟子になさいました。そして伯欽とお別れになつて、悟空に荷物を負はせ、天竺へ向つてお進み



になりました。

それから二三日あるいて、ある溪間にさしかゝりました。と、ふいごうごうと風鳴りがし出し、見る／＼天地がまつ暗がりになつたかと思ふと、體中金色をした一匹の虎が飛び出して来て、三藏法師目がけて飛びかゝつて來ました。三藏法師はびつくりなさつて、ぶる／＼ふるへてお出でになりますと、悟空は大喜びで、

『お師匠さん、ちつとも恐れることはありません。』と云ひ乍ら、耳の中から針ほどの如意棒を引出して、それに息を吹きかけて大きく引延したかと思ふと、やにははに虎に向つて行つて、たゞ一打に叩き殺して了ひました。それから毛を一本抜いて小刀にして、虎の皮を剥いで自分の身體に着ると、

如意棒をまた針にして、耳の中へ收めて了ひました。

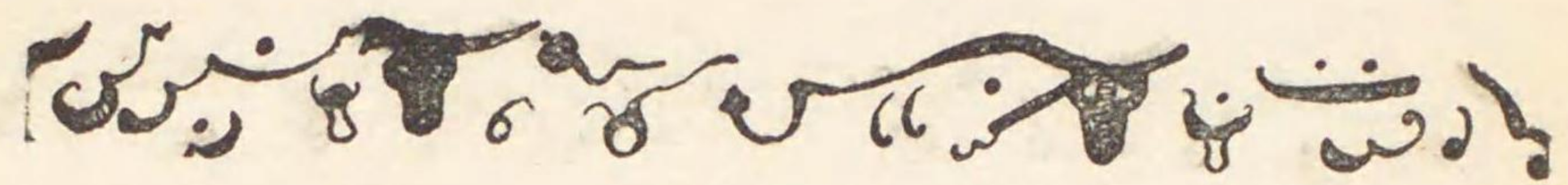
三藏法師はこのす早い有様を御覽になると、びつくりなさつて、

『お前はそんな神通力を持つてゐたのか。』と仰いました。悟空は笑ひ乍ら、『ハハ、ハハ、天地の間のどんな者でも、決して私に勝つことは出来ないでせう。とり分け今使つた如意棒を延す時は、天に届き、縮める時は耳の中に收めることが出来ます。これは龍宮にあつたもので、金箍棒と申します。』と、云ひました。

三藏法師はこれをお聞きになると、一層頼もしく思はれて、大喜びで馬をはやめて途をお進みになりました。

そのうちに、或は野に寝、或は山に泊りして行くうちに冬の初めになり





四遊記

ますと、木々は枯れ落ちて、淋しくなつて来ました。三藏師弟は、ある日霜枯れのした野原を歩いてゐました。と、ふいに草叢の中から六人の盗人が、恐ろしい風體をして、手に手に鎗や刀を持つて現はれました。「命が惜しければ金と荷物を出せ。いやだと云へば切り殺すぞ！」とちどしつけました。

その有様にびつくりなされた三藏法師は、危く馬から落ちさうになられましたので、悟空は急いで助け下して、

「お師匠さん、御安心なさいまし。私が直ぐにこいつらを追拂つてご覧に入れます。」と云ふと、盗人たちの前に出て、

「貴様達は何者だ。名があつたら名乗れ！」と、どなりつけました。すると盗人達はめい／＼に、得意になつて名乗りを上げましたので、悟空はぶ



ツと吹き出して、了つて、

「ハハハ、、、貴様達は小盗人か。俺は貴様達の主人だ。寶物を持つてゐれば出せ。」と、却つてあべこべにおどしつけました。

すると六人の盗人達はまつ赤になつて怒り出して、いきなり悟空めがけて切りつけて来ました。處がどうしたとか、手むかいもしない悟空の、毛の一本も切ることが出来ません。盗人達はあきれて、おたがひの顔と顔を見合せてゐますと、悟空は腹を抱へて笑ひ出し乍ら、

「俺の棒を受けて見ろ！」といふや否や、金箍棒をびゆう／＼と振廻して、六人の者を一人も残らず叩き殺して了ひました。

その後で三藏法師は、眉をおひそめになつて、  
「いくら盗人が悪いからと云つても、みな殺しにするといふことはいけな



い。どうしてそんな亂暴をしたのだ。』と、お責めになりました。『でも、あいつらを殺さなかつたら、あいつらは貴方を殺して了つたかも知れませんか。』

『私達は出家ではないか。たとへ人に殺されても、決して人を殺してはならないのだ。そんなことでは、天竺へ行つても果報は得られまい。』

三藏法師はかう仰つて、お嘆きになりました。悟空はそれを聞くとむツとして、

『わざわざ天竺へ行つても罪が許されなければ、私はこれでお別れいたします。』といつたまふ、空へ舞ひ上つて、東の方へ飛んで行つて了ひました。

三藏法師は空をお見上げになりましたが、もう悟空の姿は見えなくなつてゐました。それで仕方なく、ひとり出掛けようとなさいますと、そこ

へひよつこりと立派な着物と帽子を持つたお婆さんがやつて來ました。そして三藏法師に、何處へ行くのかと尋ねました。三藏法師は今までのことをすつかりお話しになりました。すると、お婆さんが、

『それはさぞお困りでせう。これから天竺へはまだ十萬八千里もあります。私は幸ひ東の方へ行きますから、お弟子にあつたら呼びもどして上げます。で、お弟子が歸つて來ましたら、この着物と帽子を身體につけて、呪文を唱へて御覽なさい。すると、もうこりこりして、またと再び悪いことはしなくなりすから。』と云ひました。そして三藏法師に二つの寶物を渡して、そつと緊箍咒といふ呪文を教へると、ぱつと金色の光を放つて東の方へ飛んで行つて了ひました。

三藏法師は、それが觀世音菩薩だとわかると、すぐさま香を焚いて後姿



を拜み、二つの品を大切に風呂敷に包んで、悟空の歸るのを待つておいでになりました。

さて悟空は、三藏法師の處からまづ直ぐに東海龍王の處へ飛んで行きました。そして龍王に會ふと、

『あゝあ、あんな心の小さい出家にはもうこりくだ。わしはまた水簾洞へ歸つて、呑氣に暮した方がいゝ。』と云ひました。すると龍王は急に眞面目になつて、

『大聖、それは間違つてをられませう。いま水簾洞へ歸られても、たかだか妖怪の頭領になる位が關の山ではありませんか。それよりかまた歸つていらつして、唐僧をつれて天竺へ行かれた方が、どの位よいか知れませんか。』とすゝめました。悟空は暫く考へ込んでゐましたが、やがてうなづく

と、

『うん、さうだ。やつぱり唐僧の供をして行かう。』と云つて、龍王と別れて外へ飛び出しました。そして、また雲にのつて走つて行きますと、途中でばつたり觀世音菩薩に出會ひました。

『お前は私の云付けを守らないで、何處へ行つてゐた？』と菩薩は、叱るやうにお尋ねになりました。

『師匠があまり叱るので、一寸東海へ行つて休んで來ました。ですが、又これから直ぐに、お供をして天竺へ參ります。』

悟空はさういつて菩薩とお別れすると、間もなく三藏法師の處へ歸つて來ました。

『何處へ行つて來た？』



『東海龍王の處へ行つてお茶をのんで來ました。』

『嘘をつけ！一寸の間に東海へ行くことが出来るか？』

すると行者は笑ひ乍ら、

『私が雲にのると、十萬八千里も飛ぶことを御存じないのですか？』と云ひました。

『さうか、お前はそんな通力を持つてゐたのか。だがわしは何も食べてないので腹が空いて來た。乾飯が風呂敷の中に這入つてゐるから出してくれ。』

悟空はかしてまつて風呂敷を開いて見ますと、中には立派な着物と帽子とが這入つてゐました。悟空はそれを見て、

『これは唐から持つてお出でになつたのですか？』と、訊ねました。

『さうだ、わしが小さいとき使つてゐたものだ。それを體につけると、習はなくてもお經が讀めるよ。』と三藏法師が仰いました。すると悟空がそれを大層欲しがりますので、三藏法師はおやりになりました。悟空は大喜びで、早速その着物と帽子を體につけて、大得意になつて意張つてゐますと、三藏法師は教へられた咒をお唱へになりました。すると悟空は急に、

『痛い、いたい……』と叫び乍ら、頭をかへて地べたを轉げ廻つて、あはて、帽子をとらうとしました。とうとうお了ひには帽子をめちやくに破つて了ひました。しかし縁の金箍だけはどうしてもとれません。引張つてとらうとすればする程、ますます肉の中に食ひ込んで來ます。

三藏法師は不思議に思召して、咒をおやめになりますと、悟空の痛みはけろりと癒つて了ひました。痛みがとれると悟空はすつかり怒り出して、







ら谷間の沼のそばを通りかゝりますと、突然その沼の中から五六丈もあるやうな龍が、浪をひるがへして飛び出して來ました。悟空は急いで三藏法師を馬から下して高い崖の上につれて行き、大急ぎで金箍棒を持つて駆けもどつて見ますと、もう龍はゐなくなつてゐて、たゞ荷物が残つてゐるだけ、馬の姿も見えなくなつてゐました。悟空は何處へ行つたかと方々を探し廻つてゐましたが、ふと思ひついて、沼の中へ金箍棒を突き込んで、ぐる／＼と搔廻しました。そして沼の水をすつかり泥水にしてしまひました。

すると中にかくれてゐた龍はたまらなくなつて、また陸へ飛び出して、悟空に飛びかゝつて來ました。悟空も待ちかねてゐて、金箍棒を振廻し乍ら、暫くの間は負けず劣らず戦つてゐましたが、とう／＼お了ひにはさす

かの龍も閉口して、小さな蛇に變ると、チヨロ／＼と草叢の中へ這入つてかくれて了ひました。

悟空はそれを見るとまつ赤になつて怒り出して、早速咒を唱へて地の神を呼び出しました。そして龍のことを訊ねますと、地の神は、

『この沼には昔から悪い神が住んでゐたことはありませんが、何でも去年、觀世音菩薩が一匹の龍をこの沼へお放ちになつて、お經をとりに行く人を待たせていらつしやるとか聞いてをります。』と、申しました。

そこで悟空は、雲に乗つて南海へ行かうとしますと、丁度折よくそこへ觀世音菩薩がお出でになりましたので、早速悟空は今までの事を話して、そのわけをお訊ねしますと、菩薩はお笑ひになり乍ら、

『わしがこの沼へ放してゐた龍は、西海龍王の子で、お前達が來るのを



待たせて置いたのだけれど、お前が經をとることを云はなかつたから、馬を食つたのだらう。』と仰いました。そして龍を呼んで、柳の枝で龍の體をお拂ひになりますと、忽ち一匹の馬に變つてしまひました。菩薩はまた柳の葉を三枚取つて、三本の毛とお變へになり、悟空の頭の後に植付けて、『お前が若し災難にあつた時は、この三本の毛が助けてくれるだらうから、一生懸命に唐僧を護つてくれ。』と仰つたかと思ふと、そのまゝ雲にお乗りになつて、南海へお歸りになりました。

三藏法師は菩薩の後姿を拜むと、馬に鞭をあてて、また西の方へと急ぎになりました。

三 猪 八 戒

さて三藏法師と孫悟空とはそれから西の方へ二月あまりも旅をつゞけますと、やつと春になつて來ました。花が咲き、鳥がないて、あたりの景色は何とも云へぬのどかさになりました。ある日二人は道を急いでゐますと、途中で妖精をお婿さんに貰つて困つてゐる人の家來に出會ひました。

『私は妖精を退治するのはうまいのだ。私達を早くその家へつれて行け。』と悟空が云ひますので、その男は主人の家へ案内して行きました。すると主人の高太公といふ人が出て來て、奥へ通して鄭重にもてなしました。三藏法師は御自分の身分を仰つて、妖精の様子をお訊ねになりました。



「妖精と云ひますのは、何でも福陵山の者で、名を猪とか申し、くちばしが長くて耳が大きく、まるで猪のやうな妖精で、食事は一時に三十人前は平気で食べます。そして方々歩き廻る時には雲にのつて歩きます。」と、高太公が申しました。

「太公、御安心なさい。今晚はきつとその妖精を捕へて、この家を去らして御覽に入れます。」と悟空は笑ひ乍ら云ひました。太公は大層喜んで、齋飯を出してもてなしました。

日暮れ方になると、妖精が歸つて來ました。が、悟空の姿を見ると慌てて、一筋の光になつて福陵山の自分の棲家をさして逃げて行きました。その後を悟空は、直ぐに筋斗雲に乗つて逃がしはしないぞと追ひかけました。悟空は妖精の後を追つて福陵山に來て見ますと、一つの洞があつて、門

の上に雲棧洞と彫付てありました。そこで悟空は、大聲を張り上げて、『やあく、妖精。出て來い。』と、叫びました。するとさつきの妖精が、九齒の大熊手を提げて中から飛び出して來て、『何をそこでわめいてゐる。そもくわしを貴様は誰だと思つてゐるのだ。わしはその昔天上にゐて、天逢元帥といふ役目を勤めてゐたが、ある時失策をしたので下界へ追れ、あやまつて猪の腹に這入つて、遂にそのまゝこの山に留まつてゐる、猪鬃鬣といふ者だ。悪者の孫悟空、何のためにこへ來た。』と、どなりました。

「黙れ、妖精。俺は今悪い心をつつかり改めて、唐の三藏法師を護つて天竺へ行き、佛を拜んでお經を頂かうとしてゐるのだ。貴様が高太公を欺して悪い事をしてゐると聞いたから退治に來た。さあ早く出て來て、尋常に



勝負しろ！』と悟空も、叫びかへしました。

妖精はこれを聞くと慌て、熊手を捨て、菩薩にすゝめられお経をとりに行く人を待つてゐたことを話しました。そして今までの無禮を詫びて、三藏法師に會はしてくれと頼みましたので、悟空は妖精を三藏法師の處へつれて歸りました。

妖精は三藏法師の前に出ると、觀世音菩薩の教へで、お経をとりに行く人のお供をするつもりでこゝに待つてゐたことを話して、弟子にしてくださいと一生懸命に頼みました。すると三藏法師は大層お喜びになつて、すぐにお弟子になさいまして、八戒といふ名をおつけになりました。それから高太公と別れて、八戒は荷物を負ひ、悟空は金箍棒をかついで、三藏法師のお供をして、また西へと旅立ちました。

四沙悟淨

それから暫く旅をつゞけてゐると、暑い〜夏が來ました。三藏法師たち三人は黄風嶺といふ山の黄風大王を退治て行くうちに、やがて夏も過ぎ、秋の初めになりました。ある日三藏法師は二人のお弟子と流沙河といふ河のほとりまでお出でになりますと、その河は見果てのない程の廣い河で、あいにくあたりには船もなく、どうして渡つたものかと、困つていらつしやいました。

するとふいに水がむく〜と山のやうに高くなつたかと思ふと、その中から醜い顔をした首に九つの鬮髻をかけた妖精が、手に杖を持つて現はれ



ました。

八戒はそれを見付けると、いきなり走つて行つて、大熊手をとつてその妖精に打つてかかりました。すると妖精の方も杖で向つて來ましたので、八戒は一生懸命に戦ひましたが、なか／＼勝負がつきません。見かねて悟空が金箍棒を持つて加勢に出ますと、妖精は敵はないと思つたものか、急に退却して、またもとの河の中へ沈んで了ひました。八戒は怒り出して、『何處へ隠れたつて逃がすものか。』と着物をぬいで、熊手をとつて河の中へ飛び込んで行きました。そして底で待ち構へてゐた妖精と激しく戦ひましたが、何時までやつてゐても果しがないので、八戒は負けた振りをして水の上に逃げ出しますと、妖精は追ひかけて來て、浪の上で長い間戦ひました。がその時、悟空が再び加勢に出ますと、妖精はまた水の中へ隠れて

了ひました。八戒は折角陸の上まで妖精を引つ張り出して退治てやらうと思つてゐましたのに、悟空のために逃がしたものですから、怒り出して悟空に食つてかかりました。

そこで、悟空は八戒をなだめてゐましたが、日が暮れましたので、雲にのつて何處かへ行つて、間もなく齋飯を貰つて歸つて來ました。そして三藏法師にすゝめますので、八戒は不思議に思つて、

『兄貴、何處へ行つて齋飯を貰つて來たんだ？』と、訊ねました。

『それがね、こゝから七千里の間には家が一軒もないのだ。さあ、一萬里も行つたかな。』と、悟空が平氣な顔で云ふのです。

『冗談ぢやない。そんなに遠い所へ一寸の間に行かれるものか。』八戒は本當とは思はないものですから、さう云ひますと、



「お前は未だ俺の筋斗雲が一息に十萬八千里も飛ぶことを知らないのか。」  
「兄貴、そんならこんな所にぐずぐずしてゐないで、何故師匠を負つて川を渡らないのだ。」

「ハハ……。お前は馬鹿だな。お前も萬更雲に乗る事を知らないことはな  
いだらう。ぢやなぜ早く師匠を負つて一飛びにこの河を渡らないのだ。神  
通力のない人間を負つては一寸も動かれないことをお前は知らないことは  
あるまい。」

「あ、そうだった。」

八戒は頭をかきました。その夜は河のほとりて明して、翌朝になると悟  
空は直ぐに南海へ飛んで行きましました。そして觀世音菩薩にお目にかゝると、  
妖精に惱まされてゐることを話して、どうしたらよいかとうかゞひますと、

菩薩はお笑ひになり乍ら、

「あれはわしが放してをいた沙悟淨といふ者だ。唐僧の供をして天竺へ行  
くことを約束してをいたのだが、お前達が經をとることを云へば、おとな  
しく従ふものを、つまらないことをするものだ。これ木又、流沙河へ行つ  
て悟淨を呼び出し、唐僧を護つて河を渡すやうに云ひつけて來なさい。」と  
仰つて、一つの赤い瓢箪をお弟子の木又にお渡しになりました。

木又は悟空と一緒に流沙河の岸へ來ると、大聲で、

「沙悟淨は何處にゐる。お經をとりに行く人は此處にゐるぞ。早く出て來  
い。」と叫びました。すると、大きな浪の間から先刻の妖精がぬつと顔を出  
して、木又にお辭儀をしました。

「菩薩は何處にお出でですか。」





『菩薩はお出でにはならないで、私にお命じになつて、お前を唐僧の弟子にし、この河をお通し申せと仰せられた。』

すると妖精はひどく恐縮して、慌て、岸に這ひ上ると、三藏法師の前に出てお詫びをして、

『どうぞ今までの無禮をお許し下さい。前に觀世音菩薩から沙悟淨といふ名を頂き、あなたのお出でになるのをお待ちしてをりましたが、お姿を存じませので、つひ御無禮を致しました。どうぞお弟子に加へて、おつれ下さいまし。』と、お頼しました。

三藏法師は大變お喜びになつて、早速お弟子になさいまして、沙和尚といふ名をおつけになりました。悟淨は大喜びで、首にかけてゐた九つの鬪體を細でつなぎ、木又が持つて來た瓢箪を真中にをいて水へ浮べました。



そしてその上に三藏法師をおのせして、八戒と悟淨とは左右にゐて護り、行者は馬を引き、木又は雲にのつてこれらを護り乍ら、あれ程廣い流沙河を樂々と向う岸へ渡り着きました。皆が岸へ上つた時、九つの鬪體と赤い瓢箪とは風に吹かれて何處かへ飛んで行つて了ひました。三藏法師は木又に厚くお禮を云つて別れると、三人の弟子と共に、また西への旅をおつづけになりました。

### 五人參果

やがて秋も終りの頃になりました。三藏法師の一行は萬壽山といふ高山に登つてあたりの美しい景色を眺め乍ら、五莊觀といふ寺の門前へ着いて



休んでゐますと、中から二人の小僧が出て来て、三藏法師に恭々しく禮をして、

『貴方は天竺へお經をとりにお出でになる三藏法師ではございませんかと、訊ねました。』

『如何にもさうだが、どうしてそれが解る？』

三藏法師が驚いて訊ね返されますと、

『私達の師匠は鎮元師といふ仙人ですが、先日用事でよそへ出かける時、若し貴方がお出でになつたら、大切に持てなせと我々にお云付けになつたのです。』と、小僧達は申しました。

そこで一行は案内されるまゝに、客殿へ通つて勞れを休めてゐますと、そこへ小僧がまた出て来て、二つの果物を三藏法師の前に差し出し乍ら、

『師匠がこの果物を、貴方に差上げるやうにと申してゐましたから、どうぞ召上つて下さい。』といひました。

三藏法師はその果物をよく御覽になりますと、それは生れてからまだ間もない赤ん坊ですから、びつくりなさつて、

『今年は五穀がよく熟つたといふのに、何故こゝでは人を食ふのだ。』と顔色を變へて、お訊ねになりました。

『いえ、これは人參果といふ樹の實です。決して怪しいものではありません。』と小僧はしきりにすゝめましたが、三藏法師はどうしても、

『いや、樹に赤ん坊が生れるわけがない。』と仰つて、手をおつけになりません。

仕方がないので、小僧はそれを臺所へ下げました。



『この人參果は、三千年目に花が咲き、三千年経つて果がなり、また三千年経つてやつと熟す木の實で、これを一つ食べると、四萬八千年も生きられる又とない果物なのに、あの唐の坊さんはそんなことを知らないのだね。では我々で御馳走にならう。』と二人の小僧は話し乍ら、さもうまさうにむしやく／＼食べて了ひました。

その有様を戸の隙間から盗み聞きした八戒は、早速悟空に話しますと、

『名前だけは聞いてゐるが、まだ見たことはない。その實を食べると長生きが出来るといふことだ。よし俺が行つて盗んで来てやらう。』

悟空はさう云つて、そつと臺所へ忍んで行きました。幸ひ先きの二人の小僧は何處へ行つたのか姿が見えませんが、窓の所へ金の棒がいてありましたので、それを持つて裏庭の人參園へ行つて見ますと、高さが千尺もあ





やるうな大木が立つてゐて、その枝には二十あまりの人參果が手を動かして、頭を揺つて實つてゐました。悟空は樹の枝に上つて、果物を三つ取つて歸つて、悟浄と八戒とで、喜んで食べて了ひました。

處が悪いことには、一人の小僧がこれを見つけたものですから、直ぐさま三藏法師の前に行つて、

『貴方の弟子達が人參果を盗んで食つて了ひました。貴方は御承知ですか。』と訊ねました。三藏法師はびつくりなすつて、三人を呼んで人參果を盗んだかとお尋ねになりますと、悟空が進み出て、

『實は八戒があつた果物を欲しがつてゐましたし、私もどんなものかと思ひましたので、三つ落して來たのを幸ひ、三人で食べました。』と云ひました。すると小僧が怒り出して、

『お前は嘘つきだ。四つ盗んでをき乍ら三つ取つたとは何事だ。』と責めました。

氣短な悟空は腹を立て、

『この小僧達は憎い奴だな。たかゞ木の實の三つ四つとつたと云つて騒ぎ出すのなら、いつそのこと樹を倒して心残りのないやうにしてくれよう。』と思ひました。そこで毛を一本抜いて自分の姿にしてそこへ坐らせてをき、本當の自分では人參園へ飛んで行きましました。そして金箍棒を振廻して、人參果の枝も葉も果もすつかり叩き落し、その上に仙術を使つて大木を根こそぎ引倒して了ひました。そして、いゝ氣味だと喜び乍ら、もとの所へ歸つて知らん顔をしてゐました。

暫くの間、誰も何とも云ひませんから、二人の小僧は小聲で相談して、



「ひよつとすると、私達が數へ違へたのかも知れないぞ？」と、もう一度人參園へ行つて見ますと、思ひ掛けなく樹は根こそぎに倒れてゐて、目もあてられないやうな有様になつてゐました。小僧達はびつくりして、ぼんやりと思案に暮れてゐましたが、

「これはきつと、あのひげつら和尚の仕業に違ひない。あいつら四人を逃さないやうにしてをいて、師匠がお歸りになつたら仇を討つて貰はう。」と相談して、客殿の門や戸をびたりとしめて、錠前や鍵をかつて外へ出られないやうにして、

「この盗人坊主。人參果を盗んだばかりか、その上に樹を倒すとは何事だ。そこで、師匠のお歸りを待つてゐろ！」と、大聲で罵りました。

三藏法師はそれをお聞きになつたので、悟空を大層お恨みになつて、

「果物を盗み食ふことさへ悪いのに、あの樹を倒すとは何事だ。」とお責めになりました。

「何、御心配なさいませう。あの小僧達が眠つたら、すぐこゝを出掛けませう。」悟空は平氣な顔で云ひました。

そのうちに日が暮れて、東の方から月が上りました。悟空は耳から金箍棒を取り出して、口の中で咒文を唱へ乍ら門を一ぺんたゝきますと、門はひとりでにがらりと開きました。そこで三藏法師と三人の弟子は馬を引張つて、一目散に五莊觀を逃げ出しました。

五十里ばかりも走つて夜が明けた頃、一人の旅の坊さんに出會ひました。坊さんは丁寧にお辭儀をして、

「長老は何方へお出でになりますか？」と、訊ねました。



「私は唐から天竺へお經をとりに行く者です。」

「東からお出でになつたのなら、萬壽山もお越えになつたでせう。」

すると悟空がいきなり飛び出して、

「そんな所は通りません。」と答へました。坊さんは悟空を睨みつけて、

「この悪猿奴！ わしを誰だと思つてゐる。五莊觀の大仙鎮元師といふの

はわしのことだぞ。お前はよくも人參樹を倒して、夜にまぎれて逃げ出し

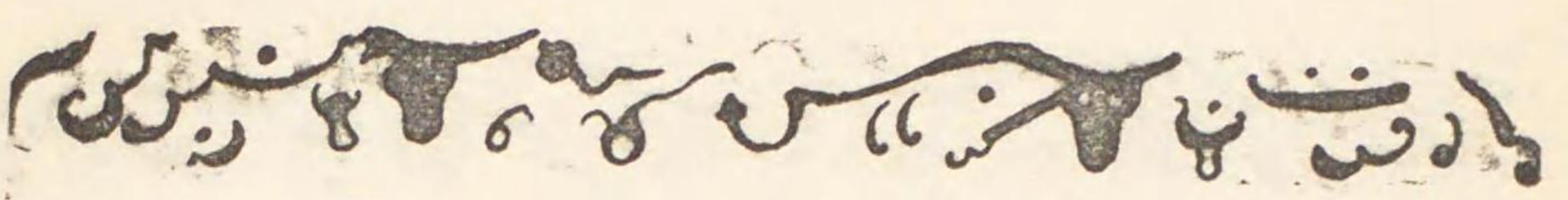
たな。さあ早くあの樹をもと通りにして返せ！」と、責めつけました。

悟空は怒り出して、金箍棒を振り廻して坊さんに向つて行きました。と、

坊さんは忽ち鎮元師の姿に變つて、袖をひろげたかと思ふと、三藏師弟四

人を馬もろともに中へ入れて了ひました。そして飛ぶやうにして五莊觀へ

歸つて來ますと、小僧達に云付けて、四人を別々に柳の木に縛りつけて、



先づ三藏法師から鞭で打たせることになりました。

悟空は慌て、

「あゝ、それは違ふ。果物を盗んだり樹を倒したりしたのは皆な私だ。師

匠を許して私を打つて下さい。」と、云ひました。

「うん、それもさうだな。」と鎮元師は笑ひ乍ら、「ではこの猿を果物の數だ

け二十打て！」

小僧は悟空の腿を三十べん打ちましたが、その時悟空は早くも腿を鐵に

化してゐましたから、痛くもかゆくもありません。そのうちに日が暮れか

けましたので、鎮元師達はめいめい、自分達の部屋に歸つて寝て了ひまし

た。その後で三藏法師は、涙を浮べて恨みを仰ひました。悟空は慰めて、

「師匠、ご心配なさいませぬ。私が只今お救ひ申します。」と云ひました。





そして術を使つて、うまく繩を解いて、三人の繩もほどきました。その代りに柳の枝を四本折つて縛りつけ、咒文を唱へてその技に息を吹きかけますと、四人の姿になりましたので、四人はまた大急ぎで逃げ出しました。翌る朝、鎮元師は四人が柳の枝だと知つたので、すぐさま雲にのつて後を追ひかけて行きました。そしてむりやり四人を袖の中へ入れて歸り、こんどは一人宛掴み出して、嚴重に縛りつけました。今度は油うでにしてやらうと云つて、庭へ大きな鍋を持出して、油を一ぱい入れてぐらく煮たせました。

『もう長い間湯に這入らないから、久し振りに行水が出来るわい。』と悟空は云ひましたが、若し鎮元師がどんな術を使ふかも知れないと思つたので、傍の石を自分の姿に變へて、本當の自分は、空へ上つて、油鍋を覗いてゐ

ました。

そのうちに油が煮立つたので、小僧や仙人達が、二十四人もかゝつてにせの悟空をやつと油鍋の中へ投げ込みますと、どしんといふ音がして、鍋の底が抜けて了ひました。沸立つた油がそこら中へ飛び散つて、廻りにゐた者は火傷をしました。不思議なのでよく見ますと、それは悟空ではなくて、大きな石だつたものですから、鎮元師はまつ赤になつて怒つて、『悪猿、よくもわしの鍋を碎いたな。もう我慢がならない。今度は三藏を煮殺してやれ。』と云つて、また別の鍋を運んで來させました。

悟空はそれを見るとびつくりして、慌て、空から下りて來て、『私は先つき小便がしたかつたので、一寸行つてゐたのです。どうぞ師匠をゆるして私を鍋の中へ入れて下さい。』と頼みました、すると鎮元師は笑



ひ出して、

『よし〜。お前の手並はそれでよく解つた。人參樹さへもとの通りにしてくれたら、お前と兄弟の約束をしよう。』と云ひました。

そこで、悟空が、きつともと通りにして返すと約束しましたので、鎮元師は皆の細をとりて、改めて客殿に通しました。

悟空はそれですつかり安心しました。そこで早速筋斗雲にのつて、方々へ飛んで行つて、人參果を生き返らせる方法を聞いて廻りましたが、誰も知つてゐる者がありません。矢張り觀世音菩薩より他ないと思つたので、またもや筋斗雲を飛ばせて南海へ行つて、菩薩にお目にかかりました。そして事情を云つてお願ひしますと、

『よし〜。』と菩薩は仰つて、早速悟空と一緒に五莊觀へお出でになりま

した。そして持つていらつした甘露水で、人參樹をもと通りに生き返らせになりました。

鎮元師は大喜びで、人參果を十ばかりとつて、菩薩をはじめ三藏師弟にもてなしました。

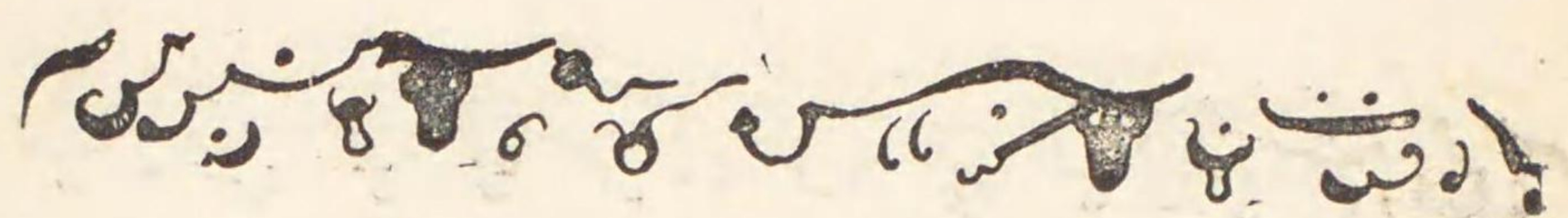
菩薩が南海へお歸りになつた後、鎮元師と悟空とはすつかり仲よくなつて、兄弟の約束をしました。三藏師弟は五日間其處で過しましたが、やがて鎮元師に別れを告げて、また西への旅をつゞけました。

### 六 金角銀角

漸く冬も過ぎて、春の初めになりました。或日三藏師弟は、ある高山に

銀角 金角



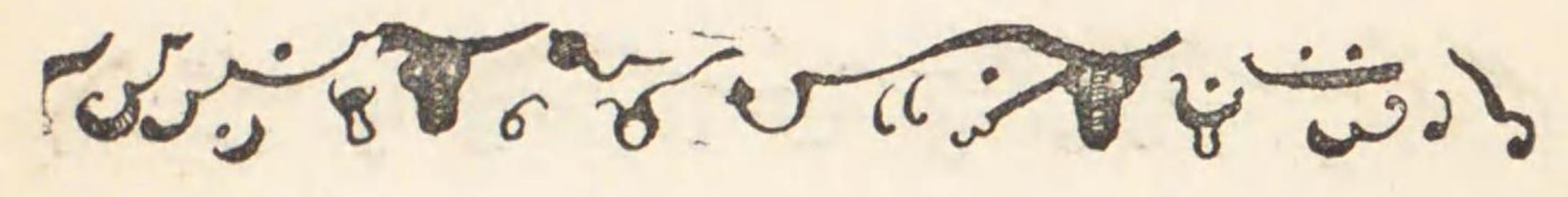


差掛つて、険しい山路を登つてゐますと、途中で樵夫に出會ひました。そして、この山の奥の蓮花洞といふ處に金角、銀角といふ二つの妖魔がゐるといふことを聞きました。しかし、悟空は平氣なもので、

『それはきつと小妖怪だらう。俺が行く程のこともあるまい。』と云つて、先づ八戒の様子を見せにやることになりました。

八戒は心のうちで悟空を恨みましたが、仕方がないので、澁々熊手をついで出掛けました。

さて蓮花洞にゐる金角、銀角といふ兄弟の魔王は、唐僧が四人來たと聞いて、早速似顔畫を書いて、小怪の者共に探させてゐたところですから、八戒は直ぐに捕へられて、蓮花洞へ連れ込まれて了ひました。そして本當の猪八戒といふことがわかりますと、庭の池の中へ漬けられて了ひました。



その時、三藏法師の方では、なか／＼八戒が歸つて來ませんので、心配して三人で尋ねに出掛けました。すると途中で、年寄の怪我人が血にまみれて、道ばたに轉つて唸つてゐるのに出會ひました。これが銀角の化けてゐるのだとは知りませんから、三藏法師は大變氣の毒がつて、手當をしておやりになり、悟空に負はせて家へ送ることにしました。悟空はその道士を見ると同時に、こいつは妖怪だなとさとりましたので、鐵棒で叩き殺してやらうと考へましたが、また前のやうに三藏法師に叱られては困ると思ひました。で、途中で殺すつもりで、その年寄を負つて行きました。暫く行つて、やつと三藏法師の姿が見えなくなりました時、今こそ妖怪を殺さうと心をさめますと、銀角の方でも、直ぐに悟空の心の中を見抜いて、忽ち魔法を使つて、一つの山を悟空の頭の上に落しました。悟空はそれを



左の肩で受けて、

『そんなことでわしが壓されるものか。』と笑ひ出しますと、妖怪は少し驚いて、咒文を唱へて、また別な山を落しました。悟空はそれも右の肩で受けて、兩方の山を肩の上へのせ乍ら、星の飛ぶやうに早く三藏法師のおゐでになる方へ走り出しました。銀角はこれを見ますと、驚き、またもや急いで咒文を唱へると、今度は泰山といふ山を呼んで、悟空の頭の上へ落しました。これには、さすがの悟空も敵はなくなつて、三つの大山に壓されて、とうとうその下に押しつぶされて了ひました。

銀角はそれを見ると、ニヤ／＼笑つて、直ぐに三藏法師を追ひかけました。そして追ひつくと、雲の中から手を延して、人も馬も一緒に掴み上げて、風につて蓮花洞へ歸つて來ました。銀角はそれを見て大變喜びまし

たが、悟空がゐないので心配しますと、銀角が三つの山で壓へつけてあると云つたので、金角は早速、寶物の瓢箪と瓶を二人の小怪に渡しました。

『この中へ悟空を吸ひ入れて來い。』と云付けて、その方法を教へました。

二人の小怪が出て行くと、銀角は三藏法師と沙悟淨とを縛つて、廊下の天井へ吊上げました。そして二怪の歸るのを待つてゐました。

さて、孫悟空は三つの山に壓しつけられてしきりに泣いてゐますと、その聲が天へ聞えて、三藏法師を護つてゐる神様方を驚かせました。神様方は、直ぐに地の神や、山の神を呼び出して、

『この下に壓えられてゐるのは、齊天大聖孫悟空だ。今は大切な役目をしてゐるのだから、早く山を取つて助けてやれ。』と、命じました。

それを聞くと、山の神と地の神は、大變恐縮して、急に咒文を唱へて



山を取りのけました。悟空はやつと助かつて、身體をなでてゐますと、遠くの方でぴかり／＼光るものがあります。地の神に聞いて見ますと、それは妖怪が持つてゐる二つの寶物だと解りました。そこで、二人の神を歸らせて、自分は老人の道士に化けて、光を目當にどん／＼と駈けて行きました。間もなく、寶物を大切さうに抱えた二人の小怪に出會ひました。二人は悟空を見ると怪しんで、

「貴方は何處から來た。」と、訊きました。

「わしは逢萊山から仙術を傳へに來たものだが、お前方は何處へ行かれる。」

「われ／＼はこの山の蓮花洞の者ですが、今大王の命令で、唐僧の弟子の孫悟空を捕へに行く所です。」

「それは駄目だ。」と、悟空が笑ひ出しますと、二人の小怪は、二つの寶物を自慢さうに見せて、人を吸ひ入れる法を精しく話して聞かせました。悟空はさすがに一寸驚きましたが、何氣ない振りをして、

「成程、お前達の寶物は良いものだらうが、然し大したものぢやない。それよりかわしの寶物の方がずつといゝぞ。」と云つて、そつと毛を一本抜いて、一つの瓢箪に變へ、腰の間から出して見せました。すると二人は、それを不思議さうに見てゐましたが、暫くしてどんな役に立つのかと訊ねました。

「この寶物は天を吸ひ入れることが出来るのだ。」と悟空が云ひますと、二人はびつくりして疑ひましたが、悟空が天を吸ひ入れて見せようかと云ひますので、二人はやつと信じてこそ／＼と相談をはじめました。それは悟



空の瓢箪と、自分達の寶物と取換へてくれないだらうかと云つてゐるので  
す。悟空は思ふ壺にはまつたので、大喜びで、

『何をこそく相談してゐるのだ。欲しければ取換へてやらうか。』と、云  
ひました。

『本當に天が吸ひ入れられるなら、是非取換へて頂きたいのです。』と、二  
人は答へました。

『よし、それなら直ぐに天を吸ひ入れて見せよう。』と云ひ乍ら、悟空が咒  
文を唱へますと、一人の神様が出て來ました。そこで悟空は、そつと今の  
有様を話して、

『お前はわしの代りに玉帝にお願ひして、半時間ばかり、この瓢箪の中へ  
天を封じ込めるやうに頼んで來てくれ。』と云ひ付けました。神様は早速玉

帝の所へ行つて、その事を申し上げますと、玉帝は驚かれて、

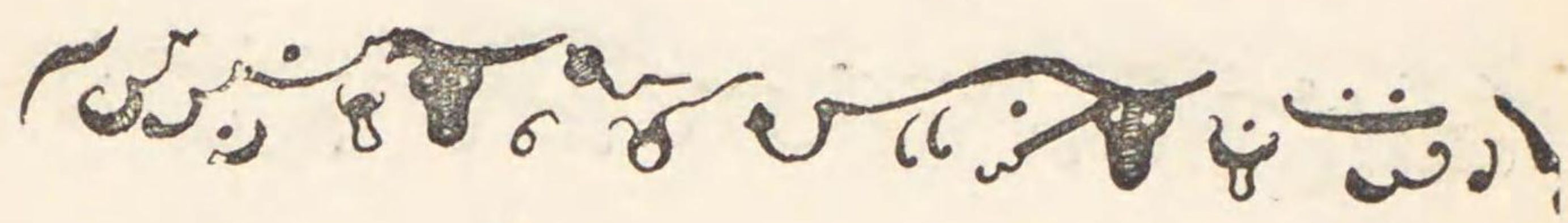
『猿め、ひどいことを云ふ。いくらなんでも天が封じられるものではない。』  
と仰つて、暫く考へてゐられましたが、やがてその神に、

『ではそれに似たやうなことをしてやらう。』と仰つて、その方法をお話し  
になりました。で、その神は、すつかり手筈をすませて、悟空の傍へ歸つ  
て來て、そつと話しました。

そこで悟空は、咒を唱へ乍ら、瓢箪を天に向つて力一杯投げ上げました。  
するとそれを合圖に、天上では眞武君といふ神様が黒旗を出して、一せいに  
日月星辰を蔽ひましたので、忽ち世界中は闇になつて了ひました。二人  
の小怪はびつくりして、

『もうわかりました。どうか早く明るくして下さい。』と頼みましたので、



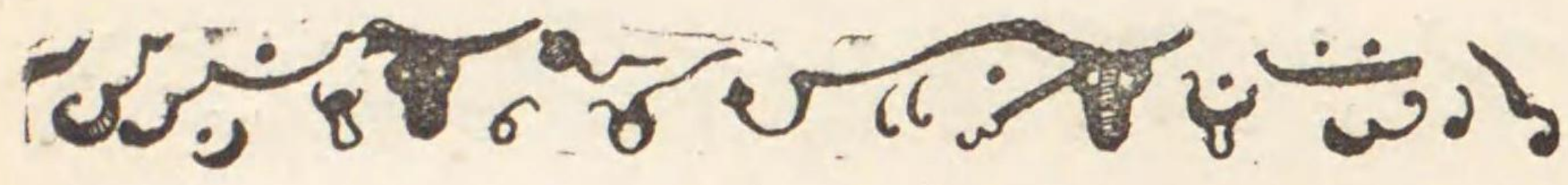


悟空がまた咒文を唱へると、天上では黒旗を卷きましたので、再び天地が明るくなりました。

やがて、悟空は、小怪達をうまく騙して寶物を取換へて了ふと、雲に上つて、後の様子を覗ひました。

急に悟空の姿が見えなくなつたので、二人の小怪は變に思ひましたが、とにかく試して見ようと、瓢箪を天へ投げ上げました。けれど一向に封じ込められません。二人はいら／＼して、何度もやつてゐるうちに、悟空はそれを空中でひよいと受取つて、もとの毛にして、自分の身體につけて了ひました。

間もなく二人は、やつと騙されたことがわかつて、眞青になつて怒り出しましたが、もう今となつては仕様がないので、洞へ歸つて、ぶる／＼ふ



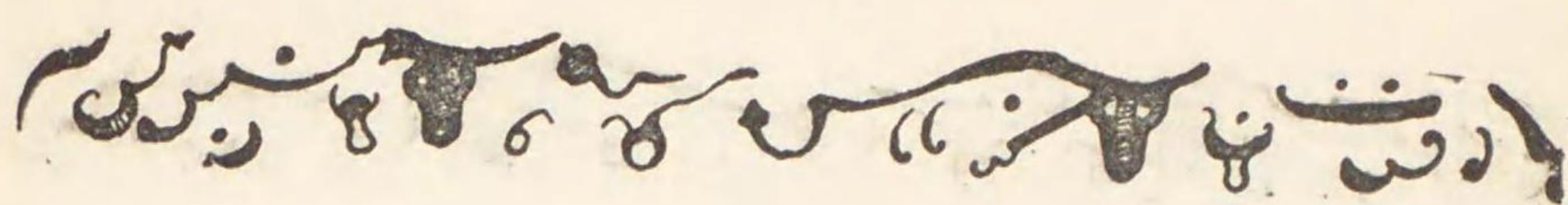
るへ乍らお詫びをしました。すると金角、銀角は齒がみをして怒つて、今度は自分達の老母の所にある棍金繩といふ寶物で、悟空を捕へてやらうと考へました。そこで二人の小怪に云付けて、老母を迎へにやりました。

その様子を蒼蠅になつて見てゐた悟空は、二人の小怪が出て行くと、急に羽をひろげて洞を飛び出しました。それから小怪の後を追ひかけて、小怪を殺してしまひ、自分が小怪に化けて出掛けました。そして金角、銀角の母を連れて洞へ歸る道で、老母を殺して、寶物の繩を取り、自分が老母に化けて洞へ歸つて來ました。

金角、銀角は老母が來たといふので、大事にもてなしてゐますと、そこへ山巡りをしてゐた小怪の一人が駈けつけて來て、

『大變々々。孫悟空が御隠居様を殺して、こゝへ乗り込んで來た様子です。』





と注進ちゆうしんしましたので、とうくごくう悟空の化けの皮かはが現あらはれて了しまひました。

魔王まわうは素早すはやく七星劍せいきんといふ寶物ほうもつの劍けんを抜ぬいて、悟空ごくうに切りかゝりましたが、悟空ごくうはそれより早く、身みをかはして洞ほらを逃にげ出だしました。銀角ぎんかくは後あとを追おつて出でて、雲くもの上うへで、暫しばらくの間戦あひだたつてゐましたが、なか／＼勝負しょうぶがつかせません。悟空ごくうは梶金繩くわうきんぜうを投なげて、銀角ぎんかくを縛しばらうとしましたが、縛しばる咒文じゆもんも解とく咒文じゆもんも知しりませんので、忽たちまち銀角ぎんかくに引捕ひつつかまつて、身動みうごきも出で来きないやうに縛しばり上あげられてしまひました。

銀角ぎんかくが悟空ごくうを捕とらへて歸かへつて來たので、金角きんかくは大喜おほよろこびで、悟空ごくうの懷ふところから二つの寶物ほうもつを取上とり上げて了しまひました。それから奥おくの間まへ這入はつて、酒宴しゆえんを始めました。

暫しばらくしてあたりあたりに誰たれもゐなくなると、悟空ごくうはそつと繩なはを抜ぬけ出だして、毛げ



を抜ぬいて自じ分ぶんの身代みがはりにしてをき、自じ分ぶんは小怪てしたに化けけて奥おくの間まへ行ゆきました。そして金角きんかくに、

『孫行者そんぎやうじやは縛しばられてゐながら、しきりに跳はね廻まはつてゐます。あれではおしまひには梶金繩くわうきんぜうが磨すり切きれるでせうから、他ほかの丈夫じやうぶな繩なはと取換とりかへませう。』と、云いひました。

金角きんかくは成程なるほどと思おもつて、他ほかの繩なはを悟空ごくうに渡わたしました。悟空ごくうはその繩なはで、にせの悟空ごくうを縛しばりつけ、梶金繩くわうきんぜうは懷ふところにかくして了しまひ、一本ほんの毛けを抜ぬいて、梶金繩くわうきんぜうに化けけさせ、それを金角きんかくの所ところへ持もつて行いつて渡わたしました。

悟空ごくうはもう大丈夫だいじやうぶだと思おもつたので、外そとへ飛とび出だすが早はやいか、忽たちまち正體せうたいを現あらはして暴あれ出だしました。ところが、又またもや瓢箪へうたんの中なかへ吸すひ入れられて了しまひました。その中なかへ入いれられると、身からだ體たいがとけるので、悟空ごくうは口くちを開あけた



ら飛出さうと毛を抜いて身代りにし、自分は小さな蟲になつて、口元に止つて待つてゐました。暫くして銀角は、もう溶けた頃だらうと云ひ乍ら、蓋を開けて見ました。と同時に、悟空はす早く外へ飛出して、また小怪に姿を變へて傍に坐つてゐました。

金角は、瓢箪の中にせの悟空が、まだ半分しかとけてゐませんので、すつかりとかして啜らうと云ひ乍ら、それを傍にゐた小怪の一人に渡し、して、自分達はまた酒宴をつゞけました。ところが、その小怪は悟空でしたから、悟空は初めの間こそ神妙に瓢箪を持つてゐましたが、誰もゐない隙を覗つて、毛を抜いてにせ物の瓢箪を拵へ、本當の瓢箪は懷の中にかくして了ひました。そしてにせ物の瓢箪を金角に渡すと、舌をべロリと出し乍ら、表へ飛び出しました。

悟空は外へ出ると忽ち本相を現はして、

『やあく、妖怪ども出て来い。』と、どなりました。

『俺は前に老怪に捉へられた孫行者、者行孫等の弟の行者孫といふ者だ！』

小怪共は驚いて、早速その事を注進しますと、銀角は變な奴が来たなと思ひ乍ら、傍にあつたにせの瓢箪を持つて出て来ました。そして雲の上に飛上ると、

『行者孫！』と呼びました。

悟空の方では銀角の瓢箪がにせ物だといふ事を知つてゐますから、一向

平氣なもので、續けざまに八九へんも返事をしました。けれど瓢箪には這

入りませんでした。次に悟空が筋斗雲にのつて、大きな聲で、

『銀角大王！』と呼びました。



銀角はそんな事は知らないものですから、  
「おう！」と答へますと同時に、忽ち瓢箪の中へ吸入せられてしまひまし  
た。

悟空は喜んで、急いで蓋を閉めると、直ぐに雲の上から飛び下りて瓢箪  
を振廻し乍ら、

『妖怪共よつく聞け！ 俺は今銀角大王を捕へたぞ。貴様等は早く師匠を  
返して謝らないと、塵殺しにしてさふぞ。』と叫びました。

すると金角大王はびつくりして、大急ぎで芭蕉扇を腰に差し、七星劍を  
提げて飛出して来て、

『弟の仇だ。覺悟しろ！』と叫ぶなり、切りかゝつて來ました。

悟空も金箍棒を取出して、一生懸命に戦ひましたが、なか／＼勝負がつ

きません。そのうちに、何百もの小怪共が、四方八方から攻めて來ました  
ので、悟空は一掴みの毛を抜きとつて、口に含んでふつと吹き出しました。  
すると、それが見る／＼うちに數限りのない悟空となつて、忽ちのうちに  
金角の軍勢を追拂ひました。

金角はそれを見ると、眞赤になつて怒つて、腰の芭蕉扇を取つて、空を  
一ぺん煽いだかと思ふと、忽ちそこら中が一面の火となりました。

さすがの悟空も、火にとり圍まれては敵はないので、慌てゝ毛をすつか  
り集めて自分の體につけ、また別の毛を一本抜いて、にせの悟空をつくつ  
て火の中にをき、自分はそつと筋斗雲にのつて、直ぐに蓮花洞へ暴れ込み  
ました。そして、そこに残つてゐた小怪を残らず打殺してしまひ、金角の机  
の上をいいてあつた寶物の瓶を懐へかくして、また外へ飛出して見ますと、



金角はにせの悟空を目がけて、まだ盛んにばたくと芭蕉扇を煽いでるま  
した。そこで本當の悟空が後から、

「金角大王!」と、呼びました。

すると金角は、小怪が呼んだのだと思つて、つひうつかり、

「おう!」と返事をしたものですから、忽ち悟空の持つてゐる寶物の瓶の  
中へ吸ひ込まれて了ひました。この瓶も前の瓢箪と同じやうに、人を吸ひ  
入れる寶物なのです。

さて悟空は、小怪の者共をすつかり平げて了ふと、洞へ行つて、三藏法  
師や悟浄や八戒を助け出しました。師弟四人は、ゆつくり御馳走を食へて、  
その晩は洞に泊りました。翌朝になると、蓮花洞に火をつけて焼き拂つて  
了ひ、再び天竺への旅に上らうと仕度をしてゐますと、その時空から、

「私の寶物を返せ。」と、云ふ者があります。

悟空はびつくりして空へ跳り上つて見ますと、それは太上老君でした。

わけを聞いて見ますと、その寶物は太上老君の物で、二人の妖怪といふの  
は、金爐童子、銀爐童子といつて、老君のお傍に仕へてゐる童子なのでし  
た。そしてその二人が、老君の寶物を盗んで下界へ逃げてゐたのださうで  
す。そこで悟空は、喜んで老君へ寶物をお返ししました。老君は瓢箪の中  
から二人の童子を出し、引きつれて天上へお歸りになりました。

### 七 刀の蓮華臺

秋が終つて冬の初めでした。三藏師弟四人は、火雲洞の紅孩兒といふ、



口から火を吹き、鼻から煙を吐く、それはく大變な妖魔に出會ひました。そしてその妖魔に、又々三藏法師が擒にされて了ひになつたのです。

悟空と八戒と悟浄とは、紅孩兒を退治して三藏法師を取返さうと、大層な意氣込みで出かけましたが、火と煙で攻め立てられて、手も足も出ませんでした。困つて考へた揚句、三海龍王を呼んで来て、雨を降らせましたが、不思議なことには火に水がかゝると、まるで油でもそゝいだやうにますます盛んに燃え上るのです。そのために、悟空はとうく大火傷をしましたので、溪川の中へ這入つて體を冷しますと、却つて苦しくなり、お終ひには息も出來なくなつて死さうになりました。

八戒と悟浄はびつくりして、急いで悟空を溪川の中から引上げ、八戒が按摩をしますと、悟空はやがて眼を開いて、痛む體を撫で乍ら、やつぱり

觀世音菩薩にお頼みしなければならないと云つて、八戒を使にやりました。八戒が雲にのつて飛んで行くのを見つけた紅孩兒は、先廻りをして菩薩に化けて岩の上に坐つてゐました。八戒はこれをにせの菩薩とは知りませんから、困つてゐることをくどくど話して加勢を頼みました。すると妖怪は、

『あの火雲洞の主はわしの古い友達だ。わしの後について來い。よく云つて聞かせて唐僧を助けてやるから。』と云つて出かけました。

八戒は根が馬鹿ですから、有難がつて後について行きますと、にせ菩薩の妖怪は、八戒を火雲洞の中へつれ込みました。と同時に、妖怪は八戒をいきなりねぢ伏せて、皮袋の中へ入れて了ひました。そして梁の上に縛りつけて置きました。

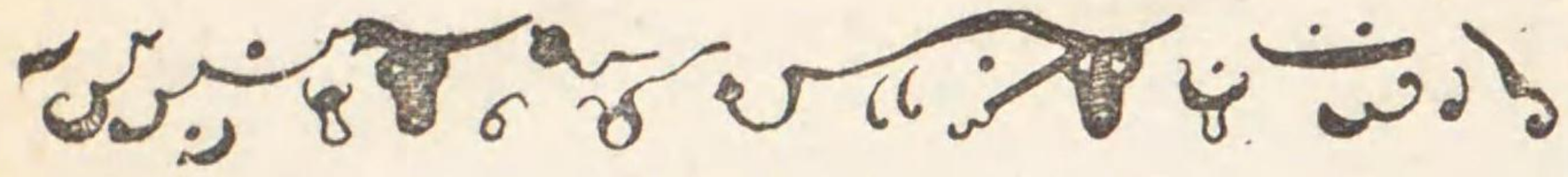




この時、悟空は悟浄と一緒に松林の中で八戒の歸りを待つてゐましたが、妙に腥い風がさつと吹き過ぎて行きました。悟空は、はくしよんとくさめを一つして、

『この風は悪い印だぞ。きつと八戒が妖怪に出會つたのだらう。よし、お前は此處で待つてゐろ。わしは一寸行つて様子を見てくる。』と云つて、痛む體を引きずるやうにして洞へ行き、蒼蠅になつて様子を窺ひますと、八戒は皮袋の中へ入れられて泣いてゐます。

そこで悟空は一先づ洞を出て、悟浄の處へ歸つて來ました。そして今見て來たことを話して、この上は觀世音菩薩にお頼みする他ないといふことになりましたので、悟空は一飛びに南海へ飛んで行きました。そして菩薩に紅孩兒のことを話してお助けをお願いしますと、菩薩は早速お聞き入れ



になつて、廣い海の水でも一時に入れて了はれる寶の瓶と、六本の刀を蓮の花に見せかけてある蓮華臺とをお持ちになつて、雲にのつて火雲洞へお出でになりました。

先づ悟空は洞へ行つて、扉を叩きこはして暴れ込みました。すると妖怪の方でも怒り出して、長い鎗で突いて來ました。二人は暫く戦つてゐましたが、間もなく悟空が負けた振りをして逃げ出しますと、妖怪はやつぎとなつて追つかけて來ました。そして菩薩の前迄來ますと、悟空は直ぐ様菩薩の金色の光の中にかくれて了ひました。妖怪は怒つて菩薩に、

『お前は孫行者を助けようとして來たのか。何といふ菩薩だ。』とどなつて、鎗を振廻していきなり突きかゝりましたが、菩薩は早くも金色の光と變つて空へ舞ひ上り、悟空と一緒に様子を御覽になつておゐでした。妖怪は



笑ひ乍ら、

『悪猿め、俺と何度戦つても勝てないので、くされ菩薩を呼んで来たが、此奴も俺の一鎗で吹つ飛んで了つた。いやはや笑止な事だ。おや、蓮華臺を忘れて行つたぞ。どれ坐つて見てやらうか。』と臺の上に登り、菩薩のやうな恰好をして見ました。

その時菩薩はにつこりなさつて、柳の枝でお招きになりますと、今迄花のやうに見えてゐた蓮華臺は、忽ち三十六本の刀に變つて、に、よ、き、く、動き出して、妖怪の兩足を突き刺しました。すると妖怪はびつくりして、慌て、刀を取つて捨てようとしたが、刀は忽ち釣針のやうに曲つて、抜くことが出来ません。妖怪は悲しい聲を上げて、

『菩薩、ゆるして下さい。私の命をお助け下さつたら、もう決して悪いこ





とはしません。』と叫びました。そこで菩薩は、悟空と空から下りてお出でになつて、

『お前は今の言葉に背くまいな。』

『命さへ助けて下さつたら、お弟子になります。』と紅孩兒が申しました。

菩薩は柳の葉を剃刀になさつて、紅孩兒の頭をくりくりにお剃りになつてから、咒文をお唱へになりますと、今迄刺つてゐた刀がばらりと落ちました。しかも、刀の跡が別に痛みもしませんので、紅孩兒は謀反氣を起して、忽ち鎗を振廻して菩薩に突きかゝつて來ました。

それを見た悟空が怒り出して、金箍棒で打ちかゝらうとしますと、菩薩はそれをお止めになつて、五つの輪を出してお投げになりました。と、それが忽ち紅孩兒の頭や手足に嵌つて了ひました。そして菩薩が咒文をお唱

へになると、妖怪は痛がつて轉げ廻り乍ら、しきりにお詫びをしますので、菩薩はお許しになつて、紅孩兒を弟子になさいました。そして名を善財童子とおつけになりました。

間もなく菩薩がこの童子をつれて南海へお歸りになりましたので、悟空は松林で待つてゐる悟淨の所へ歸りました。それから二人で洞へ行つて、妖怪の手下の者共を攻め滅ぼして、三藏法師と八戒とを助け出しました。三藏法師はすつかり譯をお聞きになりますと、嬉し涙を流してお喜びになり、手を合せて南の方をお拜みになりました。それから悟淨が慥へた齋飯を皆でたらふく食べて、師弟四人は又も遠い旅にと出かけました。



八 白い龜

それから三藏法師四人は、車遲國といふ國の仙人に化けてゐた三人の妖怪を退治たり、その他方々の妖怪を滅して、どんく道を急ぐうちに、また一年目の秋の初めになりました。或日師弟四人は橋もない海のやうに廣い通天河といふ河のほとりへ出ました。三藏法師は、この前に河で困つたことを思ひ出して、溜息をついてをられました。これと云つていゝ考へも浮びません。

「おや何か聞えるぞ。」

八戒がさう云ひますので、氣をつけて見ますと、成程遠くの方で鼓や鐘

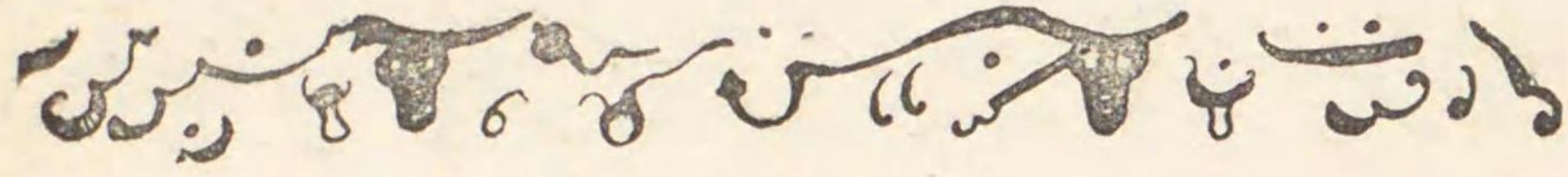


を鳴らしてゐます。

四人はそこへ行つて見ようと、音のする方へ近づいて行きました。行き着いて見ると、その音のする家といふのは中々立派な家で、中では今大勢の人が集つて、法事をしてゐる様子です。どうしたわけか解らないが、とにかく一晩泊めて貰はうと思つて案内を乞ひますと、家の人は坊さんがお出でになつたと云ふので、鄭重に座敷へ通しました。この家の主人といふのは、六十位のお爺さん二人で、陳清、陳澄といふ者でした。

三藏法師は、家の様子を御覽になりまして、普通の法事とは違ふので、不思議に思はれてわけをお訊ねになりますと、主人のお爺さんは悲しうな顔をして話をしました。それはかう云ふわけなのです。

この二人のお爺さんは兄弟でした。二人には一人づゝ一秤金といふ八つ





の女の子と、陳關保といふ七つになる男の子がありました。ところが、この村に靈感大王といふ荒神様がゐて、毎年作物の實るやうに雨を降らせたり、風を吹かせたりしてくれて、村の人々は大變ありがたがつてゐたのですが、そのお禮に毎年のお祭りの日には、男の子と女の子とを一人づつ差上げねばならないのでした。若しそれを差出さなかつた時は、神様が怒つて、その年の作物をめちゃ／＼にしてしまふのです。それで今年も、この一秤金と陳關保とを上げる事になつてゐるのです。それが丁度今日なので、親類中の者が集つて、子供達と別れの法事を開いてゐる最中なのでした。二人の子の親はわけを話しておい／＼泣き出しました。それをすつかり聞いて了つた悟空は、

『そんな悪い奴は見逃してをけない。』と云ふが早い、いきなり自分は陳

關保に化け、厭がる八戒をむりやり一秤金の姿に變へさせました。そして二人は子供の身代りになつて、紅塗の盤の上に乗せられ、大王の廟に運ばれました。

村の人々が廟の前を去つて了ふと、暫くして腥い風がさつと吹いて來ました。それと同時に、忽ち妖怪が目の前に現れて、

『食つてやるぞ！』と大きな口を開けました。

『どうぞ早く食べて下さい。』と悟空の陳關保は、わざと妖怪の方に首を突き出しました。

すると妖怪は、今年も勝手が違ふぞと思つて、少々たぢ／＼してゐます。臆病者の八戒は、もう我慢が出来なくて、急に本相を現して、やにはに盤を飛び出すと、熊手をとつて、いきなり妖怪の肩にぐざと突き刺しました。





だしぬけなので、それにはさすがの妖怪もびつくりして逃出ししました。  
 悟空も本相を現して、直ぐに二人で追ひかけましたが、妖怪は手向ひを  
 しても敵はないと思つたものか、忽ち風になつて姿を消して了ひました。  
 二人は陳澄の家へ歸つて、すつかりの話しをしますと、皆は大喜びで、一  
 層四人を大切にもてなしました。そしてその晩は、陳の家へ泊りました。  
 翌朝、三藏法師が目覚めると、まだ秋の初めですのに大變な寒さで、  
 外は一面雪景色でした。しかも二三尺は積つてゐました。皆は、  
 『これはどうしたことだ。』とびつくりしました。三藏法師は溜息をうつき  
 になつて、  
 『あゝ困つたことになつた。三年の約束で出て來たのに、もう八年経つて  
 も未だ佛のお顔さへ拜まれない。一日もぐずぐずしてはをれないのに……』



と、涙を浮べて仰いました。  
 悟空は、とにかく様子を見て來ようと云つて、陳澄達と馬に乗つて河邊  
 へ行つて見ました。河は一面に凍つてゐて、人がしきりに渡つてゐます。  
 氷を割つて見ますと、二三尺も厚さがあります。  
 そこでまた家に歸つて行つて、三藏法師にお話ししますと、三藏法師は  
 急ぐ旅なのだから氷を渡つて行かうと仰いました。悟浄や陳澄達が、何か  
 間違ひがあつてはいけないから、春まで待つやうにとしきりにとめました  
 が、三藏法師はいら／＼なさるばかりで、どうしてもお聞き入れになりま  
 せん。仕方なく、いよく出掛けることになりました。  
 處が、雪を降らせ、氷を張つたのは皆んな悟空に負けた妖怪の仕業で、  
 三藏法師達が渡つて來たら、氷を割つて四人を河の中へ引ずり込まうと待  
 白



ち構へてゐたのでした。

三藏法師達は、そんなことは知りませんから、氷を踏んでずん／＼馬を急がせて行きました。すると妖怪は、氷の下で待構へてゐて、蹄の音を聞くと、魔法を使つて一時に氷をとかしましたから堪りません。悟空は驚いて空へ飛上りましたが、三藏法師は妖怪のために、氷の中へ引きずり込まれてしまひました。八戒と悟浄とは、氷のかけらの上に乗つてゐましたが、悟空が空にゐるのを見て、

『師匠は何處へ行かれたか？』と訊ねました。が、悟空も知りませんので、また陸の方へ引返して岸へ上りました。まだ別れを惜しんで立つてゐた陳澄たちは、三人の話を聞くと、びつくりして、

『私達があればと申しましたのに、お止めにならないのですから……』

と、泣いて悲しみました。

三人は一應陳澄の家へ歸つて、齋飯を御馳走になり、武器を持つてまた河邊へ行きました。そこで二人は相談して、悟空が水の中は得意でないので、悟浄と八戒とが水の中へ這入つて、様子を見に行きました。

二人は妖怪の棲家へ行つて様子を探りますと、三藏法師は石の匣の中へ入れられてゐることがわかりました。そこで二人は妖怪をおびき出して、水の上までつれて來ましたが、悟空の姿を見ると、慌て、河の底へ逃げ込んでしまひました。そこでまた悟浄と八戒とが行つて見ますと、今度はどうしても出て來ません。

悟空は困つて暫く考へてゐましたが、やがて何か思ひつくと、大急ぎで筋斗雲に乗つて、南海の觀世音菩薩の處へ差して飛んで行きました。菩薩





はその時竹林で、竹を削つて籃を拵へてお出でになりましたが、間もなくして籃を提げて出ていらつしやいました。悟空が靈感大王に困らされてゐることを話さうとすると、菩薩は、

「お前の願ひごとはわかつてゐる。さあ出掛けよう。」と仰つて、そのまゝ雲にお乗りになつて、悟空と一緒に河岸へお出でになりました。

それを見て、八戒と悟浄とは有難がつて、手を合せて拜みました。菩薩は雲の上か、ら糸に籃をつるしてするくく河の中へお投げ入れになつて、咒文を七遍唱へてお引上げになりますと、籃の中には美しい一匹の金魚がひちく跳ね廻つてゐました。菩薩は悟空をお呼びになつて、

「この金魚はわしの蓮池に住んでゐたものだが、何時も首を出してお經を聞いてゐるうちに、いつの間にか神通力を得て、この河へ這入り、お前の



師匠を捕へたのだ。さあ早く水中へ這入つて、師匠を助け出してお出で。」と、お云付けになりました。

それを聞くと悟空は、菩薩に厚くお禮をいつて、雲から下りて、陳の家へ行きましました。

「早く来て觀世音菩薩のお姿を拜めよ。」と知らせますと、陳澄、陳清を始め村の人々は大變な喜びで、飛ぶやうにして河邊へ来て、菩薩のお姿を拜みました。その中に畫を描く者がゐて、早速お姿を寫しました。これが今に傳はる魚籃觀音の像です。

間もなく菩薩は南海へお歸りになりましたので、八戒と悟浄とは三藏法師を助けに河の底へ這入りました。見ると大勢の魚の小怪共は皆な爛れて死んでをりました。二人は直様妖怪の棲家へ行つて、三藏法師を石の匣か



らお助けしました。

三藏法師達が陸へ上つて来ますと、陳澄、陳清を始め村の人々は、今迄苦しめられてゐた妖怪を退治して貰つたのですから大喜びで、そのお禮に舟を漕へて、師弟四人をお渡ししようと思ひ出しました。するとそこへ、突然河の中から、

『大聖、そんな無駄なことをなさるな。それよりか私が皆様をお渡ししませう。』と云ふ者があります。悟空を始め人々はびつくりしてゐますと、見る／＼うちに水中から、それは／＼大きな白い龜が一匹、ぼつかり浮んで来ました。悟空は鐵棒を振上げて、

『お前は何者だ！』とどなりますと、龜は悟空の顔をじろりと見て、

『私は決して怪しいものではありません。大聖はまだ御存知ないでせうが、

私はもとからこの河に棲んでゐた者ですが、九年前にあの靈感大王がやつて来まして、私の棲家を奪ひとつて了つたのです。それを今貴方が敵を打つて下さつたので、私は又もとの家へ歸られます。それでそのお禮心に、貴方方をお渡ししたいと思つて出て來たのです。どうぞ安心して私の背にお乗り下さい。』と云ひました。

悟空は成程と思ひましたので、ぐ／＼してゐられる三藏法師に勧めて廣い甲の上に馬ごと乗せました。村の人々が別れを惜しがつてゐるうちに、龜はずん／＼進んで行つて、遂に八百里もある河をたつた一日で向う岸へ着いて了ひました。三藏法師は大層お喜びになつて、龜に厚くお禮を仰いました。

『大變御苦勞だつたが、今は何もお禮をするものがない。』



「いえ、何もお禮を頂くつもりではありません。承はりますと、天竺の如來様は人の壽命や過去未來のことを知つていらつしやるさうです。私のもとこの河で、千三百年も暮してゐまして、人の言葉もよくわかりますが、いつまで経つても畜生の姿で、人間になれないのが残念でなりません。どうぞ天竺へお着きになりましたら、佛様にお願ひして、私でも人間になることが出来るかお訊ね下さい。」と、龜は云ひました。

「あ、よし、よし。」と三藏法師が仰ひましたので、龜は嬉しさうに首を振つて、水の中へ沈んで了ひました。

九 牛魔王の芭蕉扇

三藏法師はそれから尙も西へくと進んで、途中の妖怪を退治て行くうちに、一年経つてまた秋の始めになりました。やうやく夏のひどい暑さも過ぎて、朝夕はもう冷々する位になつたので、一同は大喜びで、どん／＼道を急いでゐましたが、或日、ある村に差しかゝりますと、急にむし暑くなつて、行けば行く程、暑さがまして来るやうです。變だなど思つて、土地の老人に聞いて見ますと、そこから六十里行つた所に、火焰山といふ火を吹く山があつて、その山から八百里の間は、草一本も生えないし、その山を越えようとするれば、たとへ鐵の身體でも、一度その火焰に會ふと、水になつてとけて了ふとのことでした。

三藏法師は話をお聞きになつて、顔色を變へてびつくりなさいました。そこで悟空が老人に、



「それでは五穀も作れないのか？」と訊ねますと、

「いえ、五穀を作る時は、鐵扇仙人の所へ行つて、寶物の芭蕉扇を借りて来て火を鎮めます。けれども、仙人はなかく貸してくれませんので、借りた時には、お禮をどつさり持つて行つてお頼みするのです。」と、老人が話しました。そしてその仙人は、こゝから千五百里もある翠雲山の芭蕉洞に住んでゐることを教へてくれました。

『よし、それではその扇を借りて来て、火を消して、この山を越さう。』と悟空はいふや否や、忽ち雲に乗つて、芭蕉洞指して出かけました。ところが、そこには仙人はゐないで、鐵扇公主といふ女が住んでゐることがわかりました。公主は、羅刹女ともいつて、牛魔王の妻だといふことです。悟空は驚いて、

「これは不可んど。」と思ひました。そのわけは、前に述べたやうに、紅孩兒といふ牛魔王の子を降参させて以來、牛魔王から恨まれて敵のやうに思はれてゐるからです。でも何んとかして借りようと決心した悟空は、芭蕉洞へ行つて案内を乞ひました。

羅刹女は悟空が來たと聞くと、果して眞赤になつて怒り出して、寶物の劍を提げて洞の外へ飛び出して來ました。そしてどちらも一生懸命に長い間戦ひました。しかし、羅刹女は、お終ひにはとても敵はないと思つたものか、いきなり芭蕉扇を取出して一煽ぎしましたからさア大變です。見る／＼悟空の體は、木の葉が風に飛されてひらく／＼と舞ふやうに、空高く舞ひ上つて、一晚中飛ばされ、明方になつてやつとある山の頂上へ落ちました。悟空は山の上に立つて、こゝは一體どこだらうと思ひ乍ら、その山



を見ますと、そこは須彌山だとわかりました。悟空は呆れて、溜息をついて、

『やれ〜芭蕉扇つて恐しいものだな。この山から火焰山まではどの位あるか知ら？ 昔わしは此處で靈吉菩薩のお助けを借りて、妖怪を降参させたことがあつたが、あれから暫く菩薩にもお目にかゝらない。御挨拶旁々お訪ねして、火焰山からの道程を聞かう。』と思ひ乍ら、山を下つて、菩薩のお寺へ這入つて行きました。

菩薩は悟空の話をお聞きになると、大笑ひをなさつて、

『あの芭蕉扇で一煽ぎすると、八萬四千里は飛ぶのだ。火焰山から此處まで五萬里はある。私は幸ひ如來から定風丹を頂いてゐるから、これをお前に上げよう。これを持つてゐれば、扇でいくら煽れても、恐れることはな

い。』と仰つて、定風丹をお授けになりました。

悟空は押頂いて、着物の襟に縫ひ込み、菩薩とお別れして、大急ぎで筋斗雲に乗つて、もとの處へ歸つて來ました。

そこで今度は、鐵棒を振廻して、芭蕉洞の門を叩きこはしました。

中では羅刹女がびつくりして、また劍を提げて外へ飛び出しました。そして又芭蕉扇を出して、悟空に向けて煽ぎましたが、悟空は今度は定風丹を持つてゐますから、幾ら煽がれてもびくともしません。羅刹女はすつかり慌て、洞の中へ逃げ込み、門をピシヤリと閉めて了ひました。

悟空は身を變へて羽虫になつて、門の隙門から中へ潜り込んで見ますと、羅刹女が丁度お茶をのんでゐる處でしたから、そつと茶の泡の中へ這入つて、羅刹女がぐつと飲み乾した茶と一緒に、腹の中へ這入り込みました。





「さあ、これでも扇を貸さないか。」悟空は腹の中で跳ね廻りました。羅刹女は苦しがつて轉げ廻りました。

「扇はお貸ししますから、命だけは助けて下さい。」と、羅刹女は苦しがつて叫びました。そして侍女に云付けて、扇を持って來させました。

悟空は喉の處まで出て、扇のあるのを見届けて置いて、いきなり飛び出して、扇をとるが早いか三藏法師の所へ歸つて來ました。

皆はもう大丈夫と安心して、山へ出掛けて行つて、その扇で煽ぎますと、なか／＼どうして火が消せる處ではなく、煽げば煽ぐ程ますます火勢が盛んになるばかりです。四人は這々の體で、二十里ばかりも逃げもどりませんでした。悟空は初めて、持つて來た芭蕉扇がにせ物だと氣付きましたから、口惜しくてたまらず、何とかして本當の芭蕉扇を取つてやらうと考へました。



するとそこへ、一人の老人が、家來に齋飯を持たせて、現れました。それは地の神でした。地の神は、親切にも、本當の芭蕉扇を借りるには、積雷山の魔雲洞にゐる牛魔王に頼まなければ駄目だと教へてくれました。「では、この火焰山の火は、牛魔王がつけたのですか。」と悟空が訊ねますと、地の神が、

「いゝえ、さうではありません。この火は貴方がつけたものです。」と云ひました。すると悟空は怒つて、

「嘘をつくな！ わしは火をつけた覚えはないぞ。」と、いひますと、地の神は笑つて、

「貴方はこの火の由來を御存じないのですね。ではお話しさせう。丁度今から五百年前、貴方が天宮を騒がせた時、貴方は爐の底を踏み割つて逃



げ出されたでせう。その時の爐が碎けて落ちたのが、この山になつたので  
 す。私はあの爐の番人でしたが、よく番をしないからこんなことになつた  
 のだとお叱りを受けて、天上から追はれて、此處の土地の神にされたので  
 す。どうぞ牛魔王から本當の芭蕉扇を借りて来て、火を鎮めて下さい。さ  
 うしますと、貴方もこの山を越されますし、此處の土地の者も助かりま  
 す。その上に私も又、天へ歸つて、老君の教を聞くことが出来るのです。  
 と頼みました。

そこで悟空は決心して、八戒と悟空とに三藏法師のお傍についてゐるや  
 うに云付けてをいて、自分は直ぐ様雲を飛ばせて、三千里離れてゐるとい  
 ふ積雷山魔雲洞へ行きました。悟空が牛魔王を呼び出して、芭蕉扇を貸し  
 てくれと頼みますと、牛魔王は鐵棒を持つて外へ出て来て、紅孩兒の恨を

云つて、いきなり悟空に向つて來ました。悟空も金箍棒を振廻して暫く激  
 しく戦つてゐましたが、中々勝負がつきません。すると何處からか、  
 『牛魔王、先程から大王がお待兼ねですから、早くお出で下さい。』と云ふ  
 聲がします。牛魔王ははッとして、悟空に、

『俺はこれから友達の方へ行くから、残念乍ら今度だけは命を助け  
 てやるぞ!』と云ひ捨て、そのまゝ洞の中へ這入つて了りました。そして  
 間もなく仕度をして、碧水金睛獸と云ふ不思議な獸に跨つて、雲に乗つて  
 西北の方へ飛んで行きました。

悟空も風になつて、直ぐに後を追ひかけましたが、或山の中へ來ると、  
 牛魔王の姿を見失つて了りました。悟空はしまつたと思つて、方々探し歩  
 いてゐる内に、一筋の河のほとりへ出ました。傍の石碑には、亂石山碧波







ず。

『こんな小さな扇で、八百里もある山の火が消せるものか。』とつばきましたので、羅刹女は驚いて、

『まあ、大王はもうお忘れになつたのですか。もしこれを大きくしたい時は、左の親指で柄をしつかり押へて、咄嘘呵吸嘻吹呼と唱へるのです。すると、一丈にも二丈にもなります。八百里位の火を消すことは、なんでもありません。』と、羅刹女が話してしましたので、悟空はしめたとおつて、いきなり扇を口に咬へて、本性を現はして、外へ飛出しました。

羅刹女は、はじめて悟空と知つて、あはてしましたが、暫くの間は呆然として、たゞ悟空の行つた方角を睨んで、泣き悲しんでゐるばかりでした。悟空はやがて山の上に登つて、嬉しさのあまり、口から扇を取出して、

『咄嘘呵吸嘻吹呼。』と咒を唱へますと、ふいに一丈二尺ばかりの大きさになりました。しかし、もと／＼通りに縮める咒を知らませんから、仕方なく、そのまゝ肩に引擔いで、皆の待つてゐる方へ駈け出しました。

さて牛魔王は、酒宴も終つたので、洞へ歸らうと廊下へ出ますと、金睛獸がゐません。さては悟空に謀られたかと残念がり乍ら、大急ぎで芭蕉洞へ歸つて來ました。が、もう後の祭り、羅刹女は泣き倒れて口惜しがつてゐる處でした。牛魔王も齒ざしりして残念がりました。そこで直ぐさま羅刹女の寶劍をとつて、悟空の後を追ひかけました。

悟空は扇をかついでニコ／＼乍ら駈けてゐますと、そこへ向ふから八戒がやつて來ました。悟空は自慢氣に芭蕉扇を取る迄のことを話して、代つて擔いで貰ひました。すると八戒が、ぶつ／＼何か口の中で呟いてゐた





かと思ふと、大きかつた扇が、忽ち縮んで銀杏の葉位になつて了ひました。と同時に、八戒は、ふいに牛魔王の姿に變つて、扇を口の中へ呑み込むや否や、寶劍を振り廻して切つてかゝりました。悟空はじだんだを踏んで口惜しがつて、例の鐵棒を振上げて相手にになりました。二人は、火花を散らして戦ひました。

するとそこへ、本當の八戒が、地の神と一緒に來て、悟空に加勢しましたので、さすがの牛魔王も敵はなくなつて、魔雲洞の方へ逃げ出しました。悟空と八戒は、牛魔王を洞の入口へ追ひつめて、又ひとしきり戦ひました。その時地の神が軍勢を率ゐて來て、洞の口を塞いで了ひましたので、牛魔王は洞へ這入ることが出来なくなつて、忽ち一匹の天鷲になつて、空へ飛上つて了ひました。そこで悟空も一羽の海東青になつて空へ飛上り、眞逆



さまに天鷲の上へ落ちて來ますと、牛魔王は、今度は鷹になつて海東青に向ひました。そこで悟空も鳳凰に變つて一聲高く鳴いて突きかゝりました。牛魔王はもうそれ以上の鳥にはなれませんでしたので、困つて今度は山に飛下りて、香獐になりました。悟空も續いて地へ下りて、虎に變つて香獐に飛びかゝりました。牛魔王はうろたへて、忽ち大豹に化けて虎を殺さうと飛びかゝりました。そこで悟空が熊になりますと、牛魔王は大獅子となつて、大きな聲を張り上げて、熊を引裂かうとしました。その時、悟空が地の上进行かると見る間に、一疋の大象となりました。それで牛魔王はもう全を轉がるかと思つて、遂に本相を現はして大きな白牛となりました。眼は電のやうに光り、二つの角は鐵の塔のやうで、牙は鋭い刃のやうです。長さは千餘丈、背丈は八百丈もあります。それを見て悟空も本相を現はして、



大きな聲で叫びました。丈が一萬丈もあり、頭はまるで山のやうです。眼は日や月のやうに光り、口は丁度血の池のやうです。悟空が金箍棒を取つてうつてかゝりますと、牛魔王はそれを角で受けとめました。二人が一つの山で散々に戦つてゐるものですから、そのために山は崩れ、海は湧き返り、天地はひつくりかへるかと思はれました。

その時三藏法師を護つてゐる神様が、この物音に驚いて集つて来て牛魔王を取圍みました。牛魔王は敵はないと思つたので、又もとの姿に變り、芭蕉洞へ逃げ込んで門をしつかと閉めて了ひました。神様方は悟空と一緒に追ひかけて行つて、芭蕉洞を取圍み、洞の中へ攻め入らうとしてゐますと、そこへ八戒は地の神の軍勢と驅けつけて來ました。八戒は魔雲洞を叩きこはして、小妖共を塵殺しにして來たのでした。そこで皆で總攻撃を始

めました。牛魔王は扇を羅刹女に渡してをいて、出て戦ひましたが、遂に敵はなくなつて、雲にのつて天へ向つて逃げ出しますと、此處にも又托搭天王と哪吒太子が待ち構へてゐて、牛魔王の姿を見ると照魔鏡で照しました。と、牛魔王は大きな白牛になりました。もう自暴になつて、角で突きかゝりますと、哪吒太子は、す早く牛魔王の背に跨がつて、火輪兒を角にかけて、口から火を吹きかけました。すると牛魔王の體が燃え出しましたので、苦しがつて、

「何卒助けて下さい。きつと佛に従ひます。」と叫びました。そしてとうとう芭蕉扇は妻に預けてあると云ひましたので、太子はすぐに縛妖索といふ繩で牛魔王の鼻を通して、悟空と一緒に芭蕉洞へ押しかけました。牛魔王は大きな聲で、



「妻よ、早く扇を持つて来て、私の命を助けてくれ。」と、叫びました。羅刹女はそれを聞くとびつくりして、急いで芭蕉扇を持つて外へ飛び出して来ました。そして、頭を地べたにすりつけて、扇を差出しましたので、悟空は大喜びでそれを受取つて、神様方と一緒に、三藏法師のおゐる處へ急いで行きました。

三藏法師と悟浄とはどうなつたらうかと心配してゐますと、見る／＼雲が空に一ぱいになつて、光が天地を照し出しましたので、三藏法師は有難がつて拜んでいらつしやいました。するとそこへ、悟空八戒を始め、大勢の神様方が、しづく／＼と降つておいでになりました。三藏法師はますます有難がつて、丁寧にお禮を仰いました。

そこで悟空は、早速、扇を持つて火焰山へ行つて、力を込めて一度煽ぎ

ますと、ばつたりと火焰が止みました。二度目には涼しい風が吹いて來、三度目には雲が四方から湧き起つて來て、しと／＼と小雨が降り出しました。これですつかり暑さがとれて、涼しくなりましたので、皆は大喜びで

した。その時神様方は、三藏法師に別れを告げて、牛魔王を引立てて天へお還りになりました。その後で悟空は、羅刹女の云ふ通りに四十九度つゞけて煽いで、又と火が起らないやうに、安心して五穀が作れるやうにしました。

やがて悟空達は、三藏法師を馬にのせて、地の神に厚くお禮を云つて別れを告げました。途中何事もなく、八百里の火焰山を越して西へ向ひました。



### 十 王様の病氣

それから直も西へくと進むうちに、その年も過ぎて再び夏の始めになりました。三藏師弟は朱紫國といふ立派なお城のある都へ着きました。そこで、お城の中へ入れて貰つて、會同館といふ處で休みました。それから三藏法師は、大臣につれられて王様にお目見えをしに行きました。丁度その時、王様は長い間の病氣で寝ていらつしやいましたが、大變喜んでお會ひになり、いろ／＼なお話をなさつて、御馳走をして、おもてなしになりました。

その間、悟空等三人は、會同館で休んで待つてゐましたが、悟浄が御飯の仕度をしようといふので、悟空が八戒に、町へ買出しに行つて來いと云付けました。が、八戒は、不精者ですから動きません。悟空は欺して行かせてやらうと思つたので、

『町には焼餅や饅頭や羊羹や、その他うまいものが澤山あつたが、お前は見なかつたかい。それならいゝ、俺が行つて買つて來て、思ひ切り食べてやらう。』と云ひ乍ら、器を持つて立上りました。八戒は食しん坊ですから、それを聞くと涎を垂して、

『わしもついて行く。』と云ひ乍ら、後からついて來ました。すると途中に人だかりがあつて、押合ひもみ合ひ騒いでゐます。八戒はこれを見て、恐がつて立止りました。悟空は笑つて、

『お前はこゝで待つてゐる。俺が行つて買つて來るから。』と云ひ捨て、



走つて人ごみの中へ潜り込みました。何事だらうと思ひ乍ら一番前に出て見ますと、一つの立札が立つてゐて、その札には王様の病氣を癒した者は、國を半分やるといふ意味のことが書いてあるのです。そしてむづかしい顔をした番人が、十一人もついて番をしてゐるのです。悟空は讀んで了ふと、ほく／＼喜んでゐましたが、やがて何を思つたか、一息息を吐きますと、忽ち強い旋風が舞ひ起つて、石を轉し、砂を吹き散らしました。人々は驚いて逃げ出しました。

すつかり人がゐなくなると、悟空は隱身の術を使つて姿を消しました。そして立札を剥ぎ取つて、八戒が待つてゐる處へ行きました。

八戒は垣根に頭をあて、眠つてゐましたので、悟空はそつと札を八戒の懷に押込んで、さつさと會同館へ歸つて了ひました。

番人達は風が止んだので頭を上げて見ますと、立札がありません。びつくりして顔色を變へて方々探し廻つてゐるうちに、八戒の懷から、札が半分ばかりのぞいてゐるのを見付けました。そこで八戒を揺り起して、『お前は立札を剥がして持つてゐるが、定めし名醫なのであらう。早速王様に申上げるからこつちへ來い。』と引立てました。八戒は番人共を見ると、ぶる／＼ふるへて、

『俺が何で醫術を知つてゐよう。そして立札なんて知らないこつた。』と云ひました。が番人達が、

『それでも懷の中に札が這入つてゐるではないか。』と云ふので、八戒はふと氣がつかまりました。成程一枚の札が這入つてゐます。

『これは悪猿の仕業だ。俺がこの札をとつたつて、どうすることも出來な



5の2。』

八戒は悟空の仕業と覺つて口惜がりでしたが、番人共はそんなことは知りませんから、しきりに引立てます。八戒は事情を云つて、結局、會同館まで一緒に行くことになりました。

この時悟空は會同館で、立札のことを話して悟浄と大笑ひをしてゐますと、そこへ八戒が番人共をつれて歸つて來ました。そして悟空を見ると、ぶり／＼怒つて、

『何故あんな目に會はせたのだ。』と、どなりましたが、悟空は笑つて答へません。すると番人の中の一番上役が、悟空を恭々しく拜んで、若し醫術に優れてゐるならば、王様の病氣を癒してくれと丁寧に頼みました。悟空はうんと頷づいて、



『勿論、わしは王様の病氣を癒すつもりで、立札をとつて弟子に授けてをき、お前達をこゝまで連れて來させたのだ。けれども、王様が自身で此處へ來て頼まなければ嫌だ。』と云ひました。

そこで番人の一人がお城へ歸つて、そのことを王様に申上げますと、王様御自身がお出かけになることも出来ないで、代りに大臣をお遣はしになることになりました。間もなくして大勢の大臣が會同館へ來て、禮を厚くして頼みしましたので、悟空はそれでやつと承知して着物を着換へて出かけました。

程なく御殿へ着いて、悟空は王様の前に出ました。ところが王様は悟空の顔を見るや否や、びつくりして床の上に倒れて了ひました。女官が慌てて奥の部屋へ王様をつれて行きますと、王様は悟空を歸せと仰いました。





が、悟空は平氣です。

『では私の糸をかけて脈を診て差上げよう。』と云ひましたので、王様も喜んで診て貰ふことになさいました。

悟空が奥へ這入つて行きますと、そこには三藏法師がいらしつて、

『これ悟空、お前はわしに、また難儀をさせる積りか。』とお叱りになりました。けれど悟空は笑つて、

『師匠は御存知ありますまいが、私は醫術はうまいのですよ。』と云ひました。そして毛を三本抜いて、金の糸を拵へて、王様のおゐでになる御殿の門へ行きました。

悟空は三本の金の糸を王様の左の腕につけさせて、一方の端を手に持つて脈を見ました。それからまた同じやうに右手の脈を調べました。



それから糸をまた毛に變へて了ふと、大聲で、

『王様の御病氣は、あまり御苦勞をなさるからでございます。』と申上げました。

すると王様はすつかり感心なさつて、

『お前はよく診る。早く薬を飲ませてくれ。』とお頼みになりました。そこで悟空は侍醫を呼んで、ありつたけの薬を會同館へ届けさせました。

悟空はその晩、夜更けて、八戒と悟浄に手傳はせて薬を拵へはじめました。いゝ加減に薬をあつめて、それを粉にしてませ合せました。それから薬をこねる時には、白馬の小便をとつて來いと、悟空が八戒に云付けました。八戒はそれを聞くと、あまりの無茶にあきれてゐましたが、悟空が、



どんな病氣でも癒るんだよ。』と云つて、しきりにすゝめますので、八戒は澁々盃を持つて出て行きました。

ところが、白馬はおいそれと小便をしてくれませぬ。仕方なく歸つて來ますと、今度は悟空が行つて、わけもなく取つて來て、間もなく三粒の丸薬を拵へました。

翌る朝になると、王様の處からお使が來ました。悟空は昨夜の薬を渡して、雨水で飲むやうにと云ひました。お使の者は丁寧にお禮を云つて歸つて、早速王様に差上げて、悟空から聞いたことを申し上げました。しかし、毎日日照りつゞきで、中々雨が降りさうにありませんので、王様は雨をどらしたら得られようかと、悟空に相談をなさいました。

そこで悟空が咒文を唱へて、雨の神を呼びますと、忽ち東の方から黒雲

が湧き起つて來て、會同館の上で止りました。悟空は雨の神にすぐ雨を降らせてくれと頼みましたが、雨の神は慌てゝやつて來たので、あひにく雨の道具を忘れて來たのでした。そこで止むなく雨の神は、かうしてやれと、黒雲に乗つて、王様の城の上に行つて、べつと唾を吐きました。と、それが、ほんの少しばかりの雨になつて降りました。女官共は慌てゝ器でその雨を受けて、後で一つに集めて見ますと、澤山の雨水になりました。

王様は喜んで、悟空の丸薬をその雨水でお飲みになりました。と、俄にお腹の中が鳴り出して、ひどい下痢をなすつてお腹の中がすっかり空になつて了ひました。さうなると同時に、氣分がよくなり、びんぴんした元のお體になりました。

やがて王様は、儀式の時に着る立派な着物を着て出て來られて、改めて



三藏法師の前に跪いて拜みました。そして悟空達三人も呼び迎へて、床上げのお祝ひの酒宴をお始めになりました。

悟空は、王様がこんな病氣になれる程の心配は何んなことかとお訊ねしますと、王様は、皇后が賽大歳大王といふ妖怪のためにさらはれたことをお話しになつて、

『皇后を助けてくれたら、この國を譲つて貴方を王様にし、私は家來になります。』と、云ひました。

話を聞いた悟空は、妖怪退治をしようと決心しました。そしていよいよ出掛けようとし、そこへ變な風が吹いて來ました。それと同時に、王様を始め家來達はふる／＼ふるへ上つて、

『妖怪が來た！』と叫ぶなり、皆な逃げかくれました。

悟空は直ぐに筋斗雲に飛びのつて、空に上つて見ますと、妖怪は賽大歳大王の小怪で、女官を二人取りに來たのでした。そこで悟空は、金箍棒を振廻して追拂ひ、直ぐに下へ降つて行つて、三藏法師や王様に安心するやうにと云ひました。

王様は大喜びで、又酒宴をつゞけて、今度は自分で酌をして悟空にすすめました。

悟空が杯をとつて、お酒を飲んでゐますと、忽ち、

『西の御門の外が火事になりました。』と、注進して來ました。

悟空はそれを聞くが早いか、持つてゐた杯をぼんと空に投上げました。

王様は慌て、

『大聖、何かお腹立ちなことでもあるのですか。』と心配さうに訊ねました。





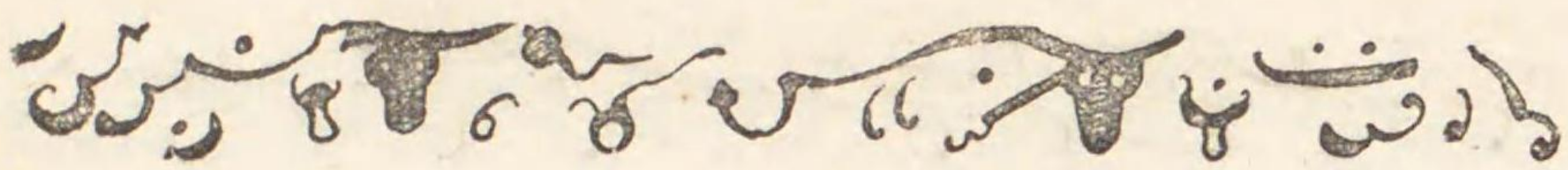


### 十一 坊主の王様

梅雨の頃になりました。じめく〜と降る雨の中を、三藏師弟の一行は、毎日歩きつゞけてゐますと、或日、ふいに善財童子が現はれて、空の中か

ら、  
『この西に滅法國といふ國があつて、その王様は一萬人の僧侶を殺す誓を立て、今迄に丁度九千九百九十六人の僧を殺して、後四人の和尚を探してゐます。ですから用心してお通りなさい。』と云つて、南海へお歸りになりました。

三藏法師はそれをお聞きになると、ぶる〜ぶるへ乍ら、悟空にどうし



ようかと相談なさいました。悟空はまあ〜と云つて、三藏法師を慰めました。そして人に見つからぬために、土穴を見つけて、皆その中へ潜り込みました。

暫くすると、悟空は様子を見て來ると云つて、三藏法師を八戒や悟淨に護らせて、自分は小さな虫になつて街の方へ飛んで行きました。そして、あちらこちらと、方々の家を覗き廻つてゐるうちに、夕方になりました。

その時一軒の宿屋を見付けました。中へ這入つて見ますと、八九人の旅人が酒に酔拂つて、着物も頭布も脱いで寝てゐましたので、悟空は計略を思ひついて、家中を飛廻つて、灯をすつかり消して了ひました。それから酔拂ひの着物や、頭布を四五人分浚つて、飛んで歸つて來ました。

それから三藏法師をはじめ皆にそれを着せて、商人に化けさせました。





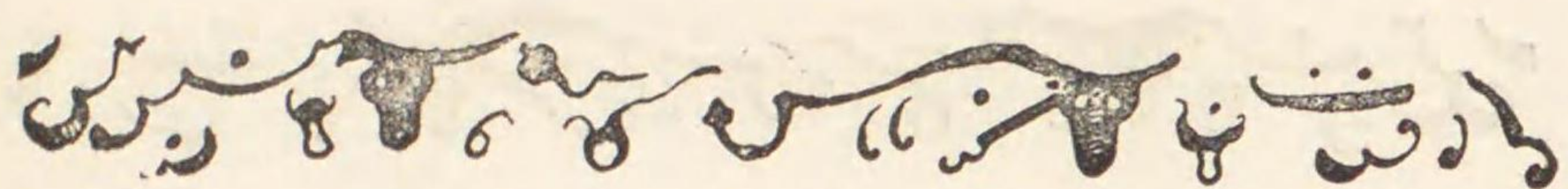
名前も商人らしく、三藏法師は唐大官、悟空は孫二官、八戒は猪三官、悟淨は沙四官と呼ぶことにして、馬を引いて街へ出かけました。

程なく街へ着くと、すつかり夜になりました。そこで宿屋を見付けて二階へ通りました。女中が燈籠を持って來ましたが、

「今晚は月がいゝから灯はいらぬ。」と悟空はことはつて、火を消して了ひました。宿のお上さんがお茶を持って來ました。

「あなた方は、何處からいらつしやいました。そして失禮乍ら御商賣と御名前は。」

「我々は北の方から來た馬商人だ。名前は、この方は唐大官、あれは猪三官、これは沙四官、俺は孫二官といふ者だ。仲間はまだ六人あるが、明日百十疋ばかり馬を引いて來ることになつてゐるのだ。ところで、馬をつな



ぐ所がないと困るのだが。」

「いえ、家は廣うございますから、何百匹でも大丈夫でございます。それから泊りは上中下とございますが、どれに致しませう。」

悟空は上にしてくれと頼みました。お上さんが喜んで、下へをりて行かうとしますと、三藏法師は悟空にお囁きになつて、

「もしや獸の料理ではないか。」と仰いますから、悟空は慌てゝ宿のお上を呼び止めて、

「わし等は、今日は精進日だから腥いものを使はないやうに。しかし宿錢は上の分だけ拂ふから。」と云ひました。と、お上は、一そうほく／＼もので、下へをりて行きました。

そのうちに料理も出來たので、それを食べて了ふと、寝ることになりま



した。處が一つ困ることがあるのは、若し寝てゐるうちに帽子がとれて、坊主頭が見えやうものなら、それこそ大變です。そこで悟空は、又お上さんと呼んで、四人は皆んな明るい所へ寝るのを厭がるから、暗い部室へ寝かせてくれと頼みました。お上さんは暫く考へてゐましたが、

『私の家は見晴しがよくて、風通しがよいやうに建て、ありますから、暗い部室つてございませんが、下の部室に四五人は這入れる大きな櫃があります。よろしかつたら、その中へお寝みになつては如何ですか？』と、云ひました。

四人はとうとうその櫃の中へ寝ることにして、お上さんに案内させ乍ら下へ降りました。皆は、荷物まで持ち込んで、櫃の中へ這入りますと、お上さんは蓋をして行つて了ひました。四人は息は出来ないし、苦しがつて

あつちへごろ／＼こつちへごろ／＼轉り廻つて、中々寝つかれません。が、そのうち、何時の間にかやつと眠つて了ひました。悟空は何時迄も眠らずに、わざと外へ聞えるやうに云ひました。

『私達の資本が五千兩、行李の中に四千兩、あの馬を賣ると三千兩……』

本當の馬商人と思はせる積りで云つたのですが、あいにくこの家に盗人が泊つてゐて、これを聞いたものだからたまりません。早速外へ飛出して行つて、間もなく二十人ばかりの仲間をつれて一度にどつと暴れ込みました。家中の人々が驚いて逃げ廻つてゐるうちに、盗人共は奥へ這入つて、大櫃に繩をかけて、八九人の盗人に背負はせて外へ出ました。するとそこを通り合はせた兵士達に見付かつたので、盗人共は櫃を投げ出すなり、慌て、逃げ出してしまひました。



早速櫃は、役所へかつぎ込まれました。そして兵士等は、『明日王様にお眼にかけよう。』と云つて、眠りました。

その時、三藏法師が櫃の中でそれをお聞きになつて、びつくりなさつて、『明日王の前で開けられたら大變だ!』と、仰いました。

悟空は腕組みをして考へてゐましたが、やがてよいことを思ひ付きました。そこで耳の中から金箍棒を取り出してそれを錐にして、櫃の底へ穴を開けました。そして自分は蟻になつて外へ這ひ出しました。それから役所の戸の隙間から外へ飛び出すと、忽ち本相を現はして、雲にのつて御殿の中へ飛び込みました。そして片腕の毛を抜いて息を吹きかけると、忽ち何千といふ眠り虫になりましたので、それを放しますと、眠り虫は、王様を始め御殿中の役人達に残らずとりついたので、皆な死んだやうに眠つて了ひ

ました。

そこで、悟空はまた腕の毛を抜いて、何千かの小悟空を作つて、金箍棒を何千もの剃刀に變へて、各々に一つづゝその剃刀を持たせて、眠つてゐる人たちの頭の髪を剃落させました。すつかり剃つて了ふと、悟空は何千の小悟空と眠り虫とを又もとの毛にして體につけて、役所へ飛び歸つて、櫃の中へ這入りました。

三藏法師はそれをお聞きになると、大層お喜びになりました。

次の朝、皇后は何時より早く目を覺まされましたが、何だか頭かひやりとするので、手を上げてさはつてみますと、髪はすつかり剃られて尻さんになつてゐました。びつくりして泣き出しさうになり乍ら、侍女を呼びますと、出て来た侍女もやつぱり丸坊主です。間もなく御殿の中では、男



も女も、くりく頭を振り廻して、大騒ぎが始まりました。  
 然し、まだ王様は眼をお覺しになりませんので、お知らせしようと起し  
 に行つて見ますと、やつぱり王様も和尚になつてをられるのです。王様は  
 御殿中の者が残らず坊主になつたと聞かれて、  
 『これはわしが澤山の僧侶を殺したからその罰であらう。わしはもう出家  
 を殺すのは思ひ止つた。早速國中へ知らせてくれ。』とお命じになりました。  
 そしてすつかり後悔なさいました。

そこへ兵士達が櫃をかつぎ込んで来て、昨夜の盗人のことを申し上げまし  
 た。王様はすつかりお聞きになつて、櫃のふたをお開けになりますと、中  
 からはまた四人の和尚が現はれました。それを見ると、王様を始め家來達  
 は、皆ぞつとして了ひました。王様が三藏法師にわけをお尋ねになりました

たので、三藏法師は唐から天竺へ行つてお經をとることをお話しになりま  
 した。そこで王様は、又々自分が悪かつたことを後悔なさつて、是非弟子  
 にしてくれとお頼みになりました。

三藏法師は喜んで王様を弟子になさいました。そして國の名も滅法國と  
 いふのはよくなからと、欽法國とおつけかへになりました。三藏法師達  
 四人は、暫くして御殿を出て別の部屋へ行つて、そこで着物を着換へまし  
 た。その時悟空は、そつと一本の毛を抜いて自分の身代りを拵へてをき、  
 本當の自分は、昨夜取つて来た旅人の着物や頭布を抱へて飛んで行つて、  
 始めに行つた宿屋へ行つて返して来ました。

その後、三藏法師達は二三日泊つてゐましたが、やがて王様を始め大勢  
 の家來達に送られて、また西への旅をつゞけました。



### 十二 燈籠の油を盗む妖怪

欽法國を離れて暫く行くと、いよ／＼天竺へ這入りました。金平府の慈雲寺といふお寺へ着きますと、寺の坊さん達が丁寧三藏法師達をもてなしました。そして、

『もう大雷音寺もこゝからそんなに遠くはありませんし、それにもう二日もたつと、佛様へ上げる燈籠へ火を入れますから、それまでゆつくりしておいでなさい。』と、申しました。

この土地の人は、大そう佛様を有難がつて、正月の十三日から十八日迄は、燈籠に灯りを入れて、佛様を喜ばせることになつてゐました。そし



て、その燈籠がかゝつてゐる金燈橋といふ橋は、それは／＼立派なものでありました。

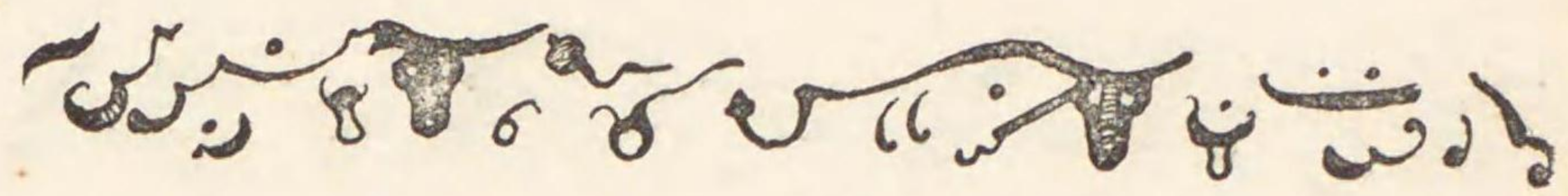
いよ／＼十五日の晩になると、三藏法師達は、坊さんに案内して貰つて、燈籠見物に出かけました。街中を歩いて、金燈橋の上へ行きますと、成程金の糸で編んだ、瑠璃を張つた大きな燈籠が三つもかゝつてゐて、まるでお月様の照るやうで、しかもい／＼匂ひがぶん／＼してゐます。その中へ入れてある油は、酥合香油といふので、一晚に三つの燈籠に一千五百斤もかかり、それを金目にするると五萬兩位かゝるといふことでした。そして夜中になつて、佛様が現はれてお出でになると、だん／＼灯が暗くなつて、油がなくなつて了ふのださうです。八戒は笑ひ出して、

『それでは佛様が油をとつて歸へられるのだな。』

燈籠の油を盗む妖怪







『昔から佛様が油をおとりになると云ひ傳へられてをります。この燈籠を上げない年は、五穀が實らないので、毎年缺かさないやうに、かうしてゐるのです。』

坊さんが云ひ終らないうちに、ふいにへんな風が吹き出しました。それと同時に、何萬といふ見物人はうろたへ出して、

『それッ！ 佛様のお出でだッ！』と叫び乍ら、ちり／＼に逃げ出しました。坊さんも三藏法師に、

『佛様がお出でになりました。早く歸りませう。』と、云ひましたが、

『私は佛を拜むために來たのですから、此處でも待ちして拜みます。佛を見て逃げるわけがありません。』と三藏法師は仰つて、ぢつと橋の上へ立つていらつしやいました。



風はだん／＼強くなるばかりでした。やがて風の中から三人の佛様が現はれました。三藏法師はそれを御覽になつて、一心に拜みました。悟空は直ぐに妖精だと知りましたから、

『お師匠さん、早くお歸りなさい。あいつ等は皆な妖怪ですよ。』と云つてゐる間に、灯は一時にぱつと暗くなつて、とう／＼三藏法師は妖怪にさらはれて了ひました。

八戒と悟浄がびつくりしてゐますので、悟空は二人を寺へ歸らせて、自分直ぐさま勛斗雲に飛びのつて、妖怪を追ひかけて行きましました。

すると途中で天の神様と會ひました。そして神様から油を盗む妖怪は、青龍山依英洞に棲む辟寒、辟暑、辟塵といふ大王で、千年も前から住んでゐること、佛様の眞似をして油をとつては、一年中の食物にしてゐること



などを聞きましました。悟空は早速飛ぶやうにして、げんえいどう 倭英洞へ駆けつけました。悟空は門の前へ突立つて、大聲で、

『妖怪、早く師匠を歸せ。』と叫びますと、牛の頭をした小怪が出て來ました。そして、悟空の姿を見ると、慌て、洞の中へ逃げ込んで了ひました。

その時三人の妖怪は、三藏法師を油で煮て食はうと相談をしてゐましたが、小怪が變な奴が來たと知らせたので、三人は小怪共にそれく武器を持たせて外へ飛び出しました。

一人は斧、一人は太刀、一人は長鎗を振廻して、悟空一人を相手に暫く戦ひました。

そこへ大勢の小怪共が出て來て、悟空を取巻いたので、さすがの悟空もいよく敵はなくなつて、遂に空に飛び上つて雲にのると、そのまゝ慈雲

寺へ歸つて來ました。そして今の様子を簡單に話して八戒と悟淨とをつれて、また青龍山へ飛んで行きました。

三人の妖怪は悟空を追つ拂つたので、小怪共と中に這入つて一息吐いてゐますと、間もなく悟空八戒悟淨達が、洞へ暴れ込んで來ましたので、又戦ひが始りました。そのうちに八戒と悟淨とは、檣にされて了ひましたので、悟空は仕方なく、自分一人だけ圍みを破つて空へ逃げて、玉帝の處へ行つて、加勢をお願ひしました。

玉帝は悟空をあはれんで、四人の星の役人を借して下さいました。悟空はそれに力を得て、大喜びで又洞へ行つてどなり立てました。三人の妖怪は、又かと飛び出して來ましたが、今度は悟空の後に四人の星があるのを見てびつくりして、それく本相を現はして犀牛になり、小怪共は山牛、





水牛、黄牛などになつて、ちりぐりに逃げ出してしまひました。

悟空は二人の星を引つれて妖怪の後を追ひかけました。その間に後の二人の星は、小怪共を谷の中へ追ひ落して残らず殺してしまひました。そして、佐英洞へ這入つて、三藏法師と、八戒、悟浄とを助け出すと、直様悟空の加勢に飛んで行きました。

悟空は妖怪が海へ逃げ込んだので困つてゐました。しかし、二人の星が海へ這入つて、妖怪を追ひかけてくれたので安心してゐますと、そこへ又、佐英洞の小怪共を退治した二人の星も来て、一緒に手傳つてくれて、海の中を探し廻り、やうやく妖怪共を退治することが出来ました。

悟空は四人の星と一しよに、一先づ慈雲寺へ歸つて行きました。そして、三藏法師を始め大勢の坊さん達に、今までのことを話しますと、三藏法師



は大層お禮を仰ひました。坊さん達も驚いて、

『この四人の和尚は活き佛だ。』と云つて、早速香を焚き、花を供へて拜みました。

悟空は四人の星にお禮を云つて、さつき剥ぎ取つて来た犀牛の角を四つ、玉帝のお土産にしました。四人の星はそれを受取つて、喜んで歸つて行きました。

悟空はまた、一つの角を慈雲寺へ納め、もう一つの角を、その國の王様に差上げました。その噂が國中に傳はりますと、どこの家でも大層有難がつて、交る交る、四人を呼んで、御馳走をしてもてなしました。

三藏法師達はそれから一月ばかりも慈雲寺に泊つてゐて、方々で供養をうけてゐましたが、かうしてゐては何時迄もきりがなし、又何時大雷音寺



へ着けるかもわからないので、或晩そつと逃げ出して出發なさいました。

### 十三 員外の魂

一月ばかり行くと、銅臺府といふ都へ着きました。その町に寇員外といふ金持があつて、その人が、一萬人の坊さんに施しをすることに、今迄に丁度九千九百九十六人だけ施しを終つてゐるといふことでした。

そこへ三藏法師達が来たものですから、員外は大へん喜んで、心をこめてもてなしました。三藏法師は此處で十日ばかりも日を送りましたが、大雷音寺のことが氣になつてなりませぬので、員外に話してお別れを云ひましたが、員外はむりに引留めて、中々行かしてくれさうにありません。そ

れでもやうやうのこと、別れを告げて出かけようと思つたと、員外は親類の人達を呼んで酒宴を開いて、十里も見送つて行つて、また酒宴を開いて別れました。

この國には澤山の盗人があつました。員外が三藏法師達を大層立派にして送るのを見ますと、これは金があるかと晩んだものですから、早速その晩、大雨なのにつけ込んで、三十何人も員外の家へ押しかけました。家中の人々がびつくりして逃げかくれるのを、盗人達は却つていゝ氣にして、お金や着物をすつかり奪つて、まだその上に、丁度目を覺まして起きた員外を蹴倒して、逃げて行つて了ひました。

盗人が逃げて了ふと、隠れてゐた人達が出て来て員外を介抱しましたが、員外は急所を蹴られてゐたので、とう／＼亡くなつて了ひました。後に殘



つたお上さんと二人の子供は、死骸にとりすがつて泣いてゐましたが、ふとお上さんが、

「お前達、もう泣くのではない。お前達のお父さんを殺したのは確にあの唐僧達だよ。私は床の中で見てゐたが、炬火を持つてゐたのが唐僧で、刀を持つてゐたのが八戒、お金をとつたのが悟浄、お父さんを殺したのが孫悟空だ。それに違ひはない。」と、云ひ出しました。

兄弟二人はうらめしくも口惜しくも思つて、夜の明けのを待つて、早速お上へ訴へました。

お上では直ぐさま百五十人の役人に云付けて、三藏法師達の後を追はせました。

三藏法師達はそんなことが起つたとは少しも知りませんから、どんく

先きへと進んで行きました。

さて、昨夜の盗人達は夜の間に逃げ出して、或山の中の大木の蔭でつた物を配けてゐますと、そこへ三藏法師達を通りかかりました。盗人共はまだその上に慾をおこして、三藏法師達のもので奪つてやらうと思つたので、手に手に拔身を持つて現はれて、三藏法師達を取巻いて了ひました。

三藏法師はふいのことびつくりなすつて、もう少しで馬から落ちさうになられました。悟空がそれを助けて、直ぐに咒文を唱へたかと思ふと、盗人共の身體が忽ち固くなつて、身動きが出来なくなつて了ひました。そこで悟空は、一掴みの毛を抜きとつて、三本餘りの繩にして、盗人共を縛り上げて了ひました。そして鐵棒を振つて、盗人共に、何處からこんな寶物を持つて来たかと責めるやうに訊ねますと、盗人達は、今迄の元氣は



何處へやら、ふるく震へ乍ら、員外の處から取つて來たと白狀しました。悟空はまさか員外が殺されたとは知りませんし、盗人達も云ひませんでしたから、盗んだ物をすつかり取上げて、盗人共はそのまゝ逃がしてやりました。取返した物は馬に乗せて、また銅臺府の方へ歸つて行きました。すると、向うの方から上の役人が百五十人も馬に乗つて驅けつけて來ました。そして、三藏法師達を見付けると、否ちうなく、大勢で四人を縛り上げて了ひました。そして荷物を調べて見ますと、員外の家で盗まれたものをすつかり持つてゐたものですから、いよく盗人にきめられて了ひました。三藏法師は昨夜からの出來事をすつかり話して、云ひわけをなさいましたが、

『然し盗人を追ひ散らして寶物を取返す程の勢ひがあるなら、何故一人で

もひつ捉へて來ないのだ。さあ、牢へ這入つてをれ。』と役人は云つて、とうとう牢の中へ入れられて了ひました。

三藏法師はぼろろと涙をこぼして泣いていらつしやると、悟空は傍で、『決して御心配なさいませぬ。明日になればさつと此處を出られますから、御安心なさいまし。然し此處は何の音も聞えないので、寝るのには却つて好い處ではありませんか。』と、慰めました。

その晩、夜更けてから、皆が安心して眠つたのを見計つて、悟空はそつと小さな虫になりました。そして牢屋を抜け出して、員外の家へ飛んで行つて、そつと中へ這入つて見ますと、澤山の燈明をつけて、お上さんと二人の子供が棺の前へ坐つておい／＼泣いてゐました。悟空は棺の上へ飛んで行くと同時に、大聲で、



「えへん！」と、咳をしました。

すると母子三人はびつくりして、顔色を變へました。が、お上さんは、やうやく棺の方を見て、

「員外、生き返へりましたか！」と聲をかけました。悟空は員外の聲をまねて、

「いやわしは未だ活きない。わしは今閻魔大王の命令でお前達を責めに來たのだ。何故お前達は罪もない人をひどい目に會はせるのだ。」と云ひますと、お上さんはびつくりして、

「いえ、いえ、どうして私が罪もない人をひどい目に會はせませう……。」と、云ひました。

「では、唐僧達四人をどうして訴へたのだ。盗人達は三十人ばかりも來た

ことはお前も知つてゐよう。四人の坊さんは、盗人を追拂つて品物を取返してくれた位なのに、それをお前は何とも思はないで役所へ訴へて、しかも牢へ入れたではないか。それで閻魔大王は、大層お怒りになつて、早速お前達を冥土へ連れて來いとお云付けになつたので、私が迎へに來たのだ。」と、悟空が云ひますと、お上さんを始め二人の子供は驚き悲しんで、暫くの間は口も聞けないで、ぶる／＼ふるへてゐました。悟空はまた、

「若しお前達が冥土へ行くのが厭なら、早く役所へ行つて唐僧達を助け出せ。そしたら閻魔大王にお願ひして、お前達の命を助けてやらう。然し少しでもぐず／＼してゐたら、すぐに連れて行くぞよ。」と、云ひました。

母子三人は、泣き出して、明日の朝早く役所へ行つてお願ひするから、助けてくれとしきりに頼みました。



夜が明けると、悟空は役所へ飛んで行つて、役人達が出て来るのを待つてゐました。そのうちに役人がすつかり揃ふと、悟空は飛び上つて、大きくなく片脚を雲の中からぬつと突き出しました。そして恐ろしげな聲を出して、

『よつく聞け、わしは玉帝の使の浪蕩遊神である。貴様達は經を取る活佛を捉へてをいて牢で苦しませてゐるが、早く助け出さないと、この脚で貴様達を蹴殺して、その上に街をめちゃ／＼に踏み散らしてやるぞ!』と、どなりました。

役人達はそれを聞くと、ぶる／＼ふるへ上つて、地べたへ跪いて拜み乍ら、

『私共が悪うございました。すぐに活佛をお助け致しますから、何卒そ

のお脚をお動かしにならないやうにお願ひ致します。』と、云ひました。

『では早く唐僧達を助け出せ。少しでも遅くなると、この城を蹴つぶすぞ。』と悟空が云ひました。そして脚をかくして、また虫になつて牢の中へ飛び歸つて、知らぬ振りをしてゐました。

役人達が顔を見合はせて驚いてゐますと、そこへ員外の息子が二人で走つて来て、早く唐僧達を許してくれと云つて、昨夜のことも話しましたので、役人達もいよ／＼恐くなり、早速三藏法師達を牢から出して、何度も何度も丁寧は無禮を詫びました。けれども悟空と八戒は、餘程腹が立つたと見えて、

『貴様達は昨日私達を捉へて盗人と云つたな。私達はこのまゝでは歸られない。』といきまきました。しかし、役人達が平詫りに詫るので、三藏法師



は見かねて悟空と八戒をなだめて、役所を出て、員外の家へ行きました。すると兄弟が、むやみにお辭儀をして一心にお詫びをしました。が、お上さんは黙つて坐つたまゝ、挨拶もしません。悟空はむかつとして、『婆ア、お前達はよくも我々をひどい目に會はせたな。よし、俺は今から員外の魂を呼んで来てこらしてやるぞ。』と云ふなり、雲にのつて、見る見る空の中へ消へて行つて了ひました。

それから悟空は閻魔大王の處へ飛んで行つて、大王に今度の事情を話して、員外の魂を貰つてもとの所へ歸つて來ました。そして八戒に棺のふたをあけさせて、魂を入れますと、不思議にも、員外は忽ち生き返つて棺を飛び出しました。そこで悟空はお上さんのためにひどい目に會つたことを話しますと、員外は大變怒り出して、お上さんを打つたり蹴つたりして、

役所へ突き出してもお詫びをすると云ひ出しました。お上さんは今度はいよく本當に後悔して、泣いてお詫びをしましたので、三藏法師も可哀さうに思召されて、一生懸命に員外をなだめました。

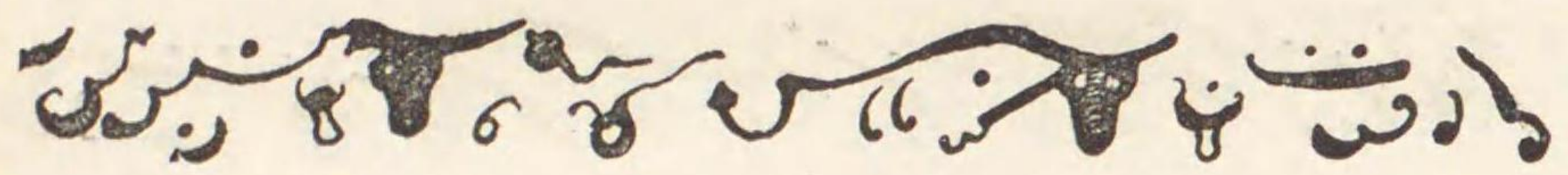
員外は生き返るし、盗まれた物はすつかり歸つて來るし、寇の家の人々にとつては、これ位嬉しいことはありませんので、又々酒宴を始めて、家中總がゝりて、三藏法師達を丁寧にもてなしました。それから翌る朝、三藏法師達が出發する時には、員外は樂器を鳴らしたり、旗を立てたりして送りました。役人達も集つて來て、三藏法師達を拜んで、二十里ばかりも送つて來ました。



### 十四 大雷音寺

三藏法師はだんく西へくと進んで行きますと、それから四五日も行かないうちに、とうとう長い間の目的地であつた佛様のお出でになる靈山が近くなりました。そこら一帯は、何となく花、草、木々の色が他とは變つてゐるやうに思はれました。そしてどの家からもお經を上げる聲が聞えて、三藏法師達に何處の家でもよく施し物をしてくれました。さういふ處を五六日も過ぎて行きますと、行手に五色の雲に包まれた一座の高い山の聳えてゐる麓に着きました。悟空は指さして、

『この山が釋迦如來のお出でになる靈鷲山ですよ。』と云ひますと、三藏法



師は急いで馬から下りられて、膝をついて手を合せて拜みました。

そこで一同は着物を着換へて、水を浴びて體を潔めました。三藏法師は毘盧帽をお被りになつて、錦欄の袈裟を着て、弟子達には馬を引かせ荷物を負せて、道を急いで行きますと、廣い河岸へ出ました。處がそこには船がありません。たゞ一本の細い獨木橋があつて、橋の傍には凌雲渡と書きつけてあります。

三藏法師はこの有様を御覽になつて、

『これは人の渡る處ではない。きつと道を間違へたのだらう。』と溜息を吐き乍ら仰いました。すると悟空が、

『いや、違ひません。違ひません。私が渡つて見ませう。』と云ふが早い、飛ぶやうにして向う岸へ渡つて、三人を手まねぎしました。が、三藏法師







す。」と云ひました。八戒も悟浄も手を拍つて驚いて。「さうだ、これはお師匠さんの死骸だらう。これからはもうあたり前の人ではなくなられたのだ。」と喜びました。船頭も喜んでお祝ひを云ひました。

そのうちに舟が無事に向う岸へ着きました。三藏法師達が岸へ上ると、船頭はまた舟をかへして川の中程まで行きましたが、同時に、ぱつと光が差したかと思ふと、寶幢光王佛となつて飛び去つて了はれました。

三藏法師はそれを御覧になると、有難がつて暫く空を拜みました。皆は身も心も軽々と山へ登つて行きました。やがて、とうとう一行は大雷音寺の山門へ着きました。あたりの光景を眺めると、高い峰は真直ぐに聳え、樹々は森々と立並んでゐる中へ、上には珊瑚の蔓や金の瓦、下には瑪瑙の





磚しきがはらでまぶしい程ほどに作つくられた建物たてものが、雲くもの上に聳そびえて出でてゐます。山門さんもんのほとりには光ひかりが輝かがやいて、いゝ匂におひの風かぜがそよよと吹ふいてゐます。三藏法師ざうはふしはてんでて舞まひをする程ほど喜んでいらつしやいますと、大勢おほぜいの尼あまさんや坊ぼうさんが出迎でむかへて、三藏法師ざうはふし達たちを案内あんないしてくれました。一の門もんの二大金剛力士だいくんごうりきしの處ところへ行くと、一の門もんから二の門もんの四大金剛力士だいくんごうりきしの處ところへ行つて、遂つひに如來にょらいのお出いででになる大雄殿だいゆうでんの前まへへ出でました。四人にんは一せいに膝ひざまづいて拜をがみました。三藏法師ざうはふしは旅行免狀りょこうめんじやうを取り出だして如來にょらいにお目めにかけました。そして、これまでの有様ありさまをすつかりお話はなしして、

『大勢おほぜいの困こまつてゐる人ひとを助たすけるために、お經けうを頂いたきたいと思おもひまして、はるく參まゐつたものでございます。どうぞ尊たうごいお經けうを頂いたかせて下くださいますよう、お願ねがひ申まを上げます。』と、申まをしました。

『お前方まへがたの住すんでゐる國くには、悪わるい者が多おほくて私わしも心配しんぱいしてゐました。孔子こうしが一生懸命しやうけんめいによいことを教をへて廻まはつてゐたが、やつぱりどうすることも出で來きなかつたやうであつた。で、私わしの所ところに今いま、三十五萬部さんじゅうごまんぶ、一萬五千三百四十四卷いちまんごせんさんひゃくしじゅうしごんの經文けいもんがあるから、これを全部ぜんぶお前まへさんに上げよう。それで大勢おほぜいの人間にんげんを救すくつておやりなさい。』と、如來にょらいは仰おつしやいました。

三藏法師ざうはふしは嬉うれしくつて嬉うれしくつてたまらず、目めに涙なみだを一杯はいためて、何度なんどもくく如來にょらいのお姿すがたを拜をがみました。

如來にょらいはその時阿難あなんと、迦葉かぜうといふ二人ふたりの尊者そんしやをお召めしになつて、三藏法師ざうはふし達たちに齋飯さいはんをおふるまひになりました。その御馳走ごちそうの美味おいしいことと云いつたら、今いままで食たべたことも見みたこともありませんでした。そればかりか、食たべる度たびに心こころのうちがさつぱりして來きました。



いよいよ如来からお經を頂くと、三藏法師はお經を馬に背負はせて、如来にお別れして山を下りました。しかしこのお經は、中に何も書いてないものでしたから、その時丁度經藏にお出でになつた燃燈古佛といふ方が可哀想に思召して、お傍の白雄尊者といふ方にお云付けになりますと、尊者は早速三藏師弟の後を追ひかけて、お經をすつかり破つて了ひました。そして又風につて雷音寺へ歸りました。

三藏法師達はびつくり仰天しました。悟空は直様鐵棒を持つて空へ飛び上つて見ましたが、もうお經はばらばらに破られてゐました。仕方なくまた飛び下りて、破られた經文を拾ひ集めました。中でも一番三藏法師が涙を流してがつかりなさいましたが、ふとそのお經に氣を付けて御覽になると、中には何にも書いてないのです。三藏法師はいよいよ殘念がつて、溜

息ばかりついてゐられましたが、悟空がやうやうなだめて、また大雷音寺へ歸つて來ました。

悟空は大雄殿の前へ出ますと、ぶりぶり怒つて。

『如来様、お聞き下さい。私達が死ぬやうな辛い思ひをして、はるく唐から此處まで参りましたのに、阿難や迦葉は私達がお禮の品物を出さないのですから、わざ／＼字のない經文をくれたのです。私共はこんなものを持つて歸つても何にもなりません。どうぞ貴方様から二人の尊者をお責め下さい。』と、叫びました。

すると如来はお笑ひになつて、

『さう騒ぐものではない。わしには阿難達の心はわかつてゐる。それにあの字のない經文は、字が書いてある經文よりも一番尊いものなのだが、お



前達にはあれでは困るであらう。では改めて、字のあるお經を上げよう。』と仰つて、また阿難と迦葉を呼び出されて、字のある經文を授けるやうにと命令されました。

そこでまた、二人の尊者に案内されて經藏へ行きましました。三藏法師は經文を出された時、一々調べて見ましたが、今度はどれも皆字のある經文でしたから、大喜びで押頂いて受取りました。それを大きな包みにして馬に負せ、その残りは八戒が負ふことになつて、三藏法師が先に立つて喜び勇んで經藏を出ました。そして大雄殿に歸つて來ますと、如來の前へ行つてお禮を申しました。

その時、何處からか何とも云へぬ美しい音樂が聞え、美しい光が輝き出して、大勢の佛様が集つてお出でになりました。如來はその佛様達に、唐

へ經文をやることをお知らせになりました。そして三藏法師を召して、お經を聞く時は、必ず行を正しくして、身體を潔めてからにし、決して粗末にしてはならないなどとお教へになりました。

三藏法師はお言葉を謹んで承つて、如來を何度も拜んで厚くお禮を述べて、お別れを告げて山門を出ました。

その時、觀世音菩薩は如來の前へ出られて、

『私が仰せを受けて唐へ参り、經を取る者を尋ねあてましたが、今やつと私の役目も終りました。數へて見れば丁度十四年間で、日數に致しますと五千四十日に八日足りません。今四人を歸してお經を傳へさせて、又こちらへ歸る間、八日かゝれば丁度よろしくなりますが、如何でせう。』とお訊ねになりますと、如來もお喜びになつて、お許しになりましたので、菩薩



は早速八大金剛力士を呼んで、八日の中に四人を送つて行つて、また連れて歸るやうにとお命じになりました。八大金剛力士はすぐに四人を連れて飛んで行きました。

それからまた、菩薩は三藏法師達を守つてゐた神様方を呼ばれて、三藏法師達が難儀に會つた數をお調べになりますと、丁度八十度も出會つてゐたのでした。

『九々八十一で、これは一度足りない。お前方はこれからすぐに唐僧に追ひついて、もう一度難儀な目に會はせてくれ。』と菩薩は、神様方にお命じになりました。

そこで神様方は大急ぎで三藏法師達に追ひついて、八大金剛力士にそつと何か囁きますと、忽ち三藏法師達の乗つてゐた雲が左右に切れて、あッ

といふ間に、師弟もろとも、地上へ落されて了ひました。

『これはどうしたことだ。私達があんまり早く走るので、八大金剛力士が暫く休むために私達を落したのだらう。それにしても此處は何處だらう。』と、悟空が云ひました。

皆は廻りを見廻しますと、東の方に一條の大きな河が流れてゐます。それはこの前に氷の中で災難にあつて、觀世音菩薩のお助けを借りたあの河でした。

河には船もなし、四人はどうして渡らうかと相談しました。が、そのうち三藏法師ももう雲に乗れますので、雲に乗つて河を渡ることになりました。

すると突然水の中から、



『もしく、こつちへお出でなさい。』と云ふ者がゐます。四人はびつくりして浮び出したものを見ますと、それはいつかの大きな白龜でした。白龜は大きな聲で、

『長い間お歸りを待つてゐましたが、ぶじにも歸りであめでたう存じます。どうぞ私の背にのつてお渡り下さい。』と云ひましたので、三藏法師達は喜んで、その背中にのりました。

間もなく向う岸へもう少して着く時、

『あの時お願ひしましたが、私が人間になれるか如何かを、如来様にお訊ね下さいましたでせうか。』と、龜が訊ねました。

三藏法師はそれをお聞きになつて、はつとなさいました。天竺へ行つても、たゞく佛を拜んでお經をとらうとばかり考へてゐたので、このこと

はさつぱり忘れてゐられたからでした。それで何とも云へなくて頭を下げておゐでになりますと、龜はすぐにそれと覺つて、むかツとしたものですから、ふいに水の中へ沈んで了ひました。悟空達は慌て、三藏法師を救ひ上げましたが、折角の經文がすっかり水に濡れて了ひました。そこで包みを開いて、砂の上へをいて乾かしました。

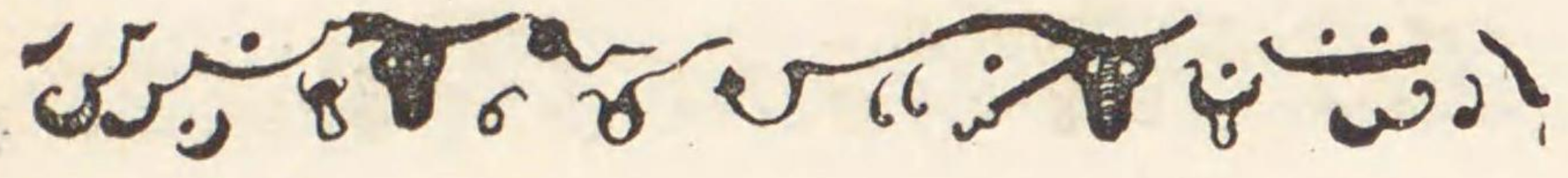
するとその時、突然大風がさつと吹き出して、雷は鳴り電は光り出して、忽ち大雨がどしや降り降り降つて來ました。悟空は怒り出して、金箍棒を振廻して、

『こら悪魔、このお經を盗むと承知しないぞ！』と、どなり乍ら飛び廻つてゐました。

八戒は馬を、三藏法師と悟浄はお經が風に飛ばされないやうにしつかり



押へてゐました。そしてとう／＼その晩は岸で夜を明しました。翌る朝になると、やつと風も静まつて雨も歇みましたので、傍の石崖の上で濡れたお經を乾しました。とそこへ、この騒ぎを知つて陳澄兄弟を始め、村の者が大勢で慌て、駆けつけて來ました。そして三藏法師を拜んで、『御出家様、何故私の家へお出でにならないのでございます。どうぞ私の家へお出でになつて、ごゆつくりお休みになつて下さい。』と、申しました。三藏法師は陳澄達の親切を嬉しく思はれて、お經をしまつてをられました。だが、その内の幾つか濡れたために破れて了ひました。それで大層残念に思つて愚痴を仰いましたが、災難に會つて破れたものは仕方ありません。悟空がやつと慰ぐさめたので、三藏法師もあきらめて陳の家へ行かれました。



陳澄兄弟を始め村の人々は、三藏法師達がお經をとつての歸り道だと聞くと、ますます有難がつて、前にもまして一層丁重にもてなしました。けれども三藏法師達にとつては有難迷惑です。何時迄もとめられさうなので、その晩夜更けて皆が寢鎮まつた頃、一行はそつと逃げ出しました。すると突然空中から、八大金剛力士が呼び止めたので、また雲にのつて東へと飛んで行きました。それから僅か一日で、唐の長安の都の上へ來ました。『我々は此處で待つてゐるから、早く下りて行つてお經を奉つてお出でなさい。菩薩は八日の間に歸つて來いと仰せになりましたが、もう五日も経つてゐます。』と、八大金剛力士が云ひました。そこで八戒はお經を負ひ、悟淨は馬をひき、悟空は三藏を助けて雲を下



りて御殿へ行きなりました。丁度その時、太宗皇帝は新らしく造られた經藏の方へ行つてお出でになりましたが、それをお聞きになると大喜びで出ていらつしやつて、大勢の家來達と一緒に三藏法師達をお迎へになりました。三藏法師は三人の弟子達に御殿の中へ經文をお運ばせになりました。そしてそれを皇帝の前に差出しますと、皇帝は大變お喜びになつて、『わしが大乘の真經を取りに行かされたために、お前に随分難儀をかけてすまなかつた。』とお禮を仰つて、いろ／＼とお訊ねになりました。

そこで三藏法師は、大雷音寺まで十萬八千里ある間の八十一度難儀にあつたことや、三人の弟子のために助けられたこと、靈山の壯嚴な有様などをすつかりお話しになりますと、皇帝は大層お感じ入りになつて、早速酒宴をお始めになりました。そして三人の弟子もお召しになつて、一同大

層御馳走になりました。

やがて日が暮れましたので、三藏法師達は皇帝に厚くお禮をのべて、一先づ皇帝にお別れを告げて、三藏法師がもとをられた洪福寺といふ寺へ歸つて行きなりました。

この洪福寺には、一本の古い松の大木がありました。三藏法師が天竺へ出立なされる時、

『若しこの松の葉が東に向いた時は、私が歸つて來る時だ。』と仰つてお出掛けになつたのですが、不思議なことには、近頃この松の葉か急に東へ向きなりましたので、

『さては師匠がお歸りになられるな。』と云つて、心待ちに待つてゐますと、そこへ經をとる僧が太宗皇帝の御殿へ歸つて來たと云ふ知らせがありました



たので、留守居の弟子共は大喜びで、俄に寺の中を掃き浄めるやら、旗を立てるやらして、大勢で門の處へ出て待つてゐました。そこへ三藏法師と三人のお弟子が、しづくくと歸つて來ました。

三藏法師は本堂へ通つて、弟子共の喜びのしるしに、皆と一緒に愉快に夕方の齋飯をおとりになりました。そしてその夜一晩中、難儀の数々と、靈山に着いてからの有様をお話になつて、十四年ぶりゆつくりとお眠りになりました。

次の朝、太宗皇帝は早速三藏法師をお招きになつて、人民達にお經を説いて聞かせるやうにと仰せになりました。そこで場所も雁塔寺といふ寺ときまつたので、太宗皇帝のお供をしてお出かけになりました。そして三藏法師は壇の上にお上りになつて、今にもお經を讀み始めようとなさつた

時です。突然空からいゝ匂ひの風が吹き怒つたかと思ふと、八大金剛力士が雲の上に現はれて、

『お經はそのまゝにして早く西天へお歸りなさい。一日でも違つたら不可ません。』と云ひました。

三藏法師ははつとお氣付さになりましたので、早速經文を下にをかれて、皇帝にお經を大切にすること、寫したお經を國中へ擴めること等を仰つて、『陛下、私は八日のうちに靈山へ歸るやうに如來とお約束をして参りました。お名残りは惜しうございますが、これでお暇致さねばなりません。』と仰るなり、見る／＼空へお登りになりました。悟空達三人も、後について白馬と一緒に空に上つて行きました。そして金剛力士の後について、西の方へ飛び去つて了ひました。



皇帝を始め、大勢の人々は、びつくりして了つて、たゞく西の空を拜むばかりでした。

それから三藏師弟は、八大金剛力士と一緒に、丁度八日目に大雷音寺へ歸り着きました。そして如来の前に目通りをしますと、如来は三藏法師に旋壇功德佛、悟空に鬪戰捷佛の名をお授けになりました。それから如来は八戒に淨壇使者の名をお授けになりますと、八戒はそれを聞いて不平さうに、

「悟空は佛になつたのに、何故わしばかりを淨壇使者といふんだらう。」とぶつ／＼云ひました。

「お前は生れつき大食ひだ。それで供養の時、お前が壇を淨める役目にあ

たなら、供養の品々が得られて却つていゝではないか。」と如来が笑ひ乍ら仰いました。

それから又、如来は悟淨に金身羅漢、白馬に八部天龍長者といふ名をお授けになりました。一人の神様に命じて白馬を靈山の後にある化龍池の中へ追ひ込ませられますと、白馬は忽ち立派な金の龍に變つて了ひました。そこで一同は、大喜びで如来にお禮を申しました。

悟空はその時三藏法師に、

「私はもう佛になつたのですから、師匠もこの後、緊箍咒を唱へて私をお苦しめになることもありませんまい。どうぞ頭の輪を外して頂けませんかと、云ひました。

「頭に手をやつて御覽。」



と、三藏法師が仰つたので、悟空は頭をなでてみますと、何時の間にか輪は失くなつてゐて、その痕さへも残つてをりませんでした。かうして四人の者も、馬も、一緒に佛様の仲間入りをしたのです。その時、美しい花が雨のやうにはらくくと降つて来て、音楽が四方からいゝ音で響き渡りますと、大勢の佛様や菩薩が、如來の前に集つてお出でになりました。そして手を合せて、口々に佛や菩薩の名を唱へ出されました。

(をばり)

ドン・キホーテ









ドン・キホーテが騎士の位を授けられた噺

今から約三四百年も昔のこと、美くしいスペインの國のラ・マンチャといふ村に、クイザダといふ年老ひた一人の紳士が住まつて居りました。クイザダは、一軒の家と少しばかりの財産とを持つてをつて、家事の手助けをする姪と、畠の番をする僕と、それから一匹の白馬と一しよに、何不自由なく暮して居りました。この白馬といふのは、クイザダと同じやうに痩せてけてゐて、をいぼれた馬車馬のやうに弱り切つてゐましたが、それでもクイザダは、立派な駿馬だと信じて居りました。



さて、クイザダには一向仕事らしい仕事といつて無かつたものですから、いつも大昔の騎士のお囃や、巨人のお囃や、悪魔のために魔法の城の中に幽閉されてゐる姫君の物語りなどを讀みふけて居りました。時とすると、晝間は勿論のこと、夜の夜中でもお囃の本を手ばなさないやうな事が、幾夜も續くことすらありました。かうしてゐるうちに、クイザダの氣は次第に變になつて来て、此の國は恐ろしい巨人や悪魔の住家であつて、澤山の姫君達が彼等のために苦しめられてゐるから、一つ自分の駿馬に跨がつて救けに行かなければならない、といふやうな事を眞らしく信するやうになつてしまひました。

クイザダの家の物置部屋には、昔お祖父さまが使かつたといふ甲冑がありました。クイザダはそれを持ち出して来て、幾日もかかつて錆びたところを

ゴシゴシ磨いたり、潰んだところの修繕を始ました。ところが残念なことに、大切な兜が大變損んでゐて、その半分は何處へ行つたか見つかりません。それで厚いボール紙を裁ち切つて、無くなつた半分をこしらへることにいたしました。やつとの事で兜の半分が出来上がると、こんどは大丈夫か一つ試験してみようといふので、長い劔をストライト引き抜いて、その兜めかけてヤツと斬りつけました。と、丸一週間も苦心に苦心をして作り上げた兜は、もろくも、たつた一撃のもとに飛び散つてしまひました。

クイザダはすつかり悲觀してしまひましたが、今は悲觀してゐる場合でないといふと再び元氣を出して、又ボール紙の兜をこしらへて、ブリキでその内側を張り交した。今度こそは、試験して見なくとも大丈夫だと思はれるやうな、立派なものが出来上りました。